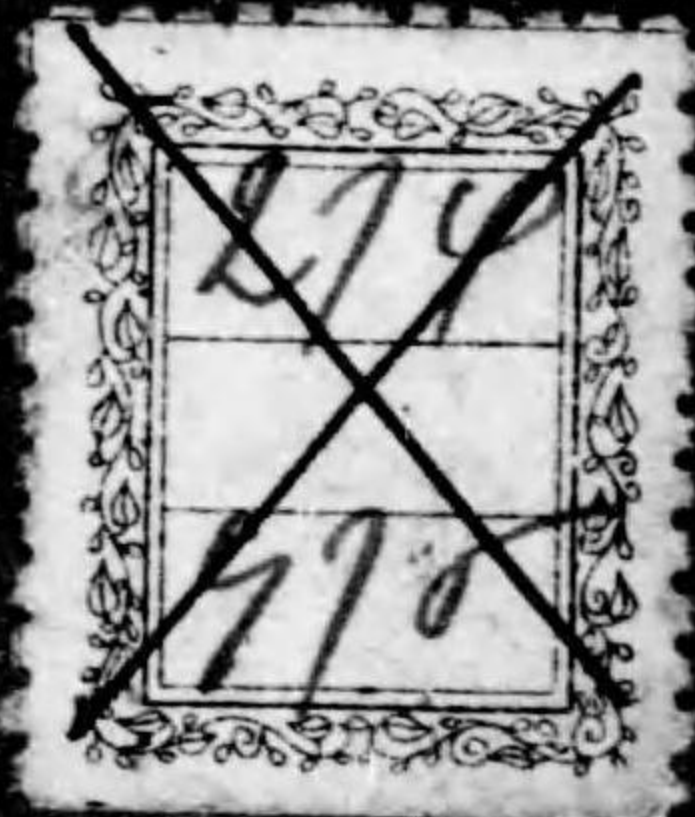


特100

371

書叢ギカア
論一キス、エイトスト
(シサツパウモ付)

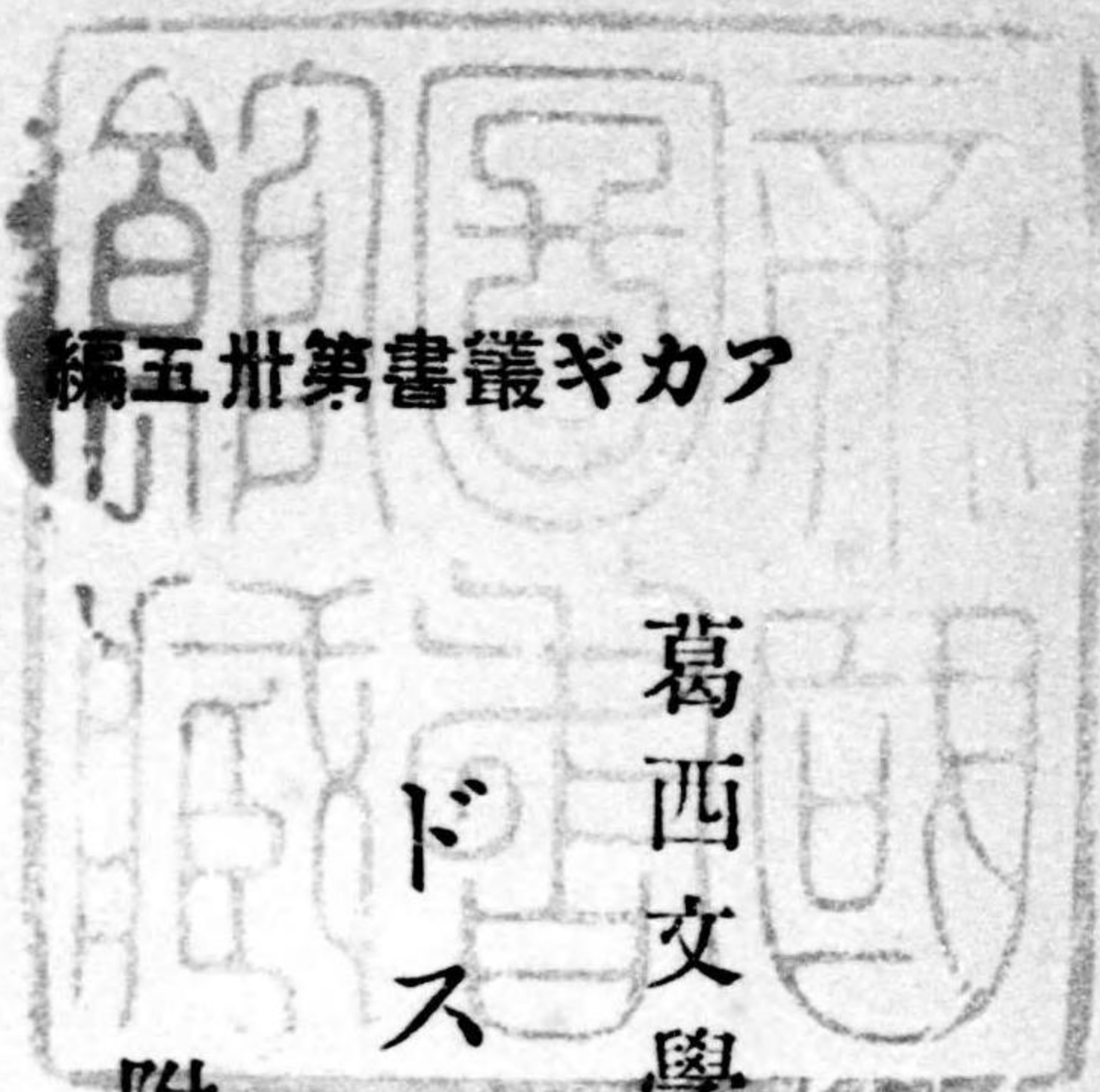


始



持100
371

編五卅第書叢ギカア



葛西文學士編

ド
ス
ト
イ
エ
フ
ス
キ
イ
論

附モウパツサン論

大正
3. 9. 10
内交

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや
懊惱之を久らして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄
て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜
を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立
志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せ
しめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が菲才自ら顧
みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以
也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝
文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を
極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尅大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行するに至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十錢にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。如何に尅大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。依つて以て從來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫の、高價、尅大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんとす。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

大正三年三月

赤城正藏白

アカギ叢書發行の報

緒言

本書は初めモウパッサン論のみを以て一冊とする豫定にて其旨豫告したものです。が之のみにては所定の頁數に充たぬ故後にドストイェフスキイ論を加へたものであります。併し補充したド氏論が却て前者より頁數も増し内容も充實したものでありますから表題の如く改題しました。

本叢書にはモウパッサンのものもドストイェフスキイのものも續々紹介せらるゝとになつて居ますから若し讀者諸君にして兩作家の創作を讀まるゝと同時に此の批評を繕かれたら多大の利益を得られると信じます。文藝の鑑賞力を養ふ捷徑は大家の批評を讀むに如くものありません。編者が菲才を顧みず本書の紹介を企てた微意は此の趣旨に外ならないのであります。

大正三年八月二十二日

編者 跋

大正三年八月二十二日

書の内容を今一度精読し其の強弱を推察せしむるべきである
 露西亜の小説の巨匠トリスチエフスキイの著したる『露西亜小
 説の巨匠トリスチエフスキイの著したる『露西亜小説の巨匠
 トリスチエフスキイの著したる『露西亜小説の巨匠トリスチエ
 フスキイの著したる『露西亜小説の巨匠トリスチエフスキイ
 の著したる『露西亜小説の巨匠トリスチエフスキイの著した
 る『露西亜小説の巨匠トリスチエフスキイの著したる』
 本書は露西亜の小説の巨匠トリスチエフスキイの著したる『
 露西亜小説の巨匠トリスチエフスキイの著したる』

露 西

ドストイエフスキイ論

露 國 メレジコフスキイ原作
 文學士 葛西 又次郎 述



トルゲネーフとレオ、トルストイとドストイエフスキイの三人は露西亜小説の代表作家である。ゴンチャロフも之に劣るものではないが、やゝ距離が隔つて居るので別に一階級に置かねばならぬ。
 ツルゲネーフは藝術的要素を代表して居る。茲に彼の強みがあり、又一方に偏して居る點もある。彼の美を愛する事が彼をして直に人生と調和せしめて居る。トルゲネーフの眼は、人間の魂よりも、深く自然の魂を探つて居る。彼は

レオ、トルストイやドストイエフスキイ程心理學者ではないが、深く全宇宙の生命を了解し、その詩は清純で、一語一語に音楽が響いて居るのである。一度彼の詩の調和に浸ると、人生は只此の爲に存在し、人はその美を享樂すべきものであるとの感情が湧くのである。

レオ、トルストイは體力の強い巨人である。調和は破られて、平和と瞑想には樂みを持たない。彼は人生を、その壯觀、原始的藝術、強い野蠻的な新しみに於て、我々に示して居る。トルストイは自分で、吾々の社會から縁を切つた。

私は自分の頭を外套の内に隠し

町から私は乞食となつて逃れた。

併し豫言者の靈魂を與へられない普通人はツルゲネーフの感激した美の瞑想に與らざる如く、此の文明の排斥にも與らない。兩作家は一方面から人生を見て居る。一人は美術家の製作所の平和なる大氣中から、又一人は抽象的道德の高所から見て居るのである。

ドストイエスキイは、兩作家よりもつと吾々に近い。彼は吾々の恐しき冷たい町に於て我々の間に交つて住んだ。彼は解決し難い謎を持つて居る。複雑なる近代的生活に面と向ふ事を避けなかつた。彼は時代の苦痛と、病から逃れなかつた。彼は吾々を友達として、同等者として愛する。ツルゲネーフの様に詩的距離をへだてない、又レオ、トルストイの様に説教者として高い位置から見るとではない。彼の思想も彼の奮闘も、吾々と同じである。彼は吾々と共通の歪よりのみ、吾々と同じく偉大であり、又穢れて居る。トルストイは智識社會の腐敗を非難する事が餘りに強く、罪深き人々の弱點に對する反抗が餘りに深い。彼は或人には貴く神聖であるかも知れないものを輕蔑し殘酷に非難し、人を畏怖せしめて居る。ドストイエフスキイは或時には、一瞬間に於て我々が共に住み我々が愛するものよりも——我々の親類朋友よりも我々に近づく。彼は病氣の時の友であり、幸運の時も、惡運の時も、我々の同僚である。共通の弱點があると云ふ考程、人を密に結合せしむるものはない。彼は我々の最も秘密

な思想——我々の内に深く隠して居る犯罪的欲求を悉く認めて居るのである。ドストイェフスキイを讀むと彼が全知全能であつて、他人の良心を明かに見透して居るので、非常な恐怖を感じる。彼は人が決して他人に打明ない、又自分にさへ自白する事を敢てしない隠れた考を曝露する。我々の心を告白した此の人が、善を信ぜよ、神を信ぜよ、汝自身を信ぜよと云つて、尙我々を許す事が出来る時は、彼は美に對する審美的熱心、又は奇怪なる豫言者の、自分勝手の説教以上の或物に依つて動かされて居るのである。

ドストイェフスキイは決して調和の名家ではない、正しい均齊と眞價值と云ふ古い規則の代表者でない。プシユキンを傑出せしめた美の感覺の後繼者でない。オトゾフ父子の作者に豊富であつた偉大なる精神の後繼者でもない。彼にはトルストイの様な體力もなく自然との直接交渉もない、彼は單に生きた人、苦しんだ人、泣いた人である。彼の涙は未だ乾いて居ない、聲にもそれが分る。彼の手は感情が高ぶつて震へて居る。ドストイェフスキイの作を了解するには讀

むだ許りでは充分でない、その中に住み、その混亂を感じなければならぬ。一旦さうすると決して忘れるとが出来ない。

ドストイェフスキイの作は讀者を戯曲的事件に紹介するに、彼一流の獨創的方法を用ゐて居る。彼は各々の心理状態、心の微妙な移り變りを、如何に觸知し難き物であつても、悉く之を細かに描寫して居る。例へば罪と罰の主人公たるラスニコイルニコフが、その罪を犯した直ぐ後で、未だ何の疑も受けない中に、土地の警官の前に來た處を見よ、作者は主人公の良心が訊問者にゆく途中に苦悶する状態を、順を追ふて詳しく物語つて居る。警察へ行く時に彼はもう疑はれた、犯罪が発見されたと云ふ、恐怖に捕へられる。それから未だ疑がかゝつて居ないと云ふ事を知ると、先の緊張した神経が弛んで、激しい喜の氣分となる、突然、救はれたと云ふ強い反動に敗けて、輕率に心中の秘密を打明け、おしやべりとなり、誰でも行き當つた者に喜びを分かちたい氣分になる。それがその土地の警察官であつてもかまはないのである。併し此の狂喜は永く續かない、ラス

コイルニコフは又直ぐ心配焦燥反抗の陰鬱な心的状態になる。誇大の發作から恢復すると、彼は罪を犯した事を如何にも不道徳な屈辱的な事の様に責め『現在の氣分に於ては、その室に急に警察官ではなく、最も親愛なる友人が一ぱいになつても、それでも彼は一言も人間らしい言葉を、彼等に云ふ事が出来ない様に思はれた、彼の心の急激な壓迫はそれ程大きかつた』彼は其後自分は罪人であるから、如何なる人とも淡白な親しい交際が出来ないと感じた。さう云ふ考が起る毎に、絶望的な永遠の孤獨と隔離の感情が、彼の魂を動搖させ壓し付けた。若し讀者が、此等の微妙なる心理状態の一つにても經驗する機會があつたら、此の描寫は必ず個人的經驗の瞬間を彼に思ひ起させ、彼をして新にその經驗の中に生活せしむるであらう。此れが作者の要求する所である。さうなると之に續いて來る心的状態は、最早詩人の單純なる想像ではなく、讀者の個人的感情となるのである。何故なれば、それは單に最初の心的状態の必然的結果に過ぎないからである。今やドストイェフスキイは讀者の心を捕へたのである、主人

公の氣分のどん底迄讀者を引きずり込み、讀者の魂を丁度渦巻が草の葉を渦の中へ吸ひ込む様に、主人公の生活の中に引き込む迄、彼を離さないであらう。讀者の同情は少し宛主人公の身に再現せられ、その良心は主人公の良心と融合し、その感情は主人公自身の感情に融け込むのである。ドストイェフスキイの作を読むて居る間は、その作中の重なる人物の生活と離れて、自分一個の生活をすると言ふことは不可能である。何故なれば、小説と現實とを、隔つる境界線が、消え失せた様に思はれるからである。主人公に同情したと云ふ丈では止まらない、それ以上になり、絶対に主人公に吸収されて了ふのである。ポルフィリーが此の犯罪者と握手するのを拒むだ時は、讀者は此の檢事に對して、一種の憤怒の情を感じるのである。この憤怒の情は、彼の疑ひ深いのを憎む個人的憎惡の念に似て居るものである。ラスコイルニコフが血に穢れた斧を提げて、二階に駆け上り、ペンキ屋が仕事をして居る、人の居ない下宿屋に身を隠した時は、讀者は、主人公と共に有らゆる恐怖の戦慄を感

じ、動悸のする心配を以て、彼が身を助かる様に、もつと早く法律の正しい刑罰より脱れる様に、ユツホヤ其の仲間の者が、彼に氣が付かない様に、結局彼の罪惡が明るみに出ない様にと熱望するのである。讀者は主人公と共に罪惡の心理的經驗を受け、其の後でも、本を讀んで了つて、此をさし置いた後でも、其の經驗が彼の身の周圍に打ち込んだ恐ろしき魔力から、脱れる事が困難である事を發見するであらう。調和とか、美とか詩の樂みとか、云ふ様な事は、總て色が薄くなつて彼の記憶から消え失せ、一瞬間の中に忘れて了ふだらう。併し此の靈魂の犯罪的經驗は決して忘れられない、ドストイェフスキイは、我々自身の苦痛の印象の様に拭ひ消す事の出来ない印象を我々の心に残す。

ドストイェフスキイの藝術的方法の一つは、主人公の氣分から氣分へ移つて行く道德的の有らゆる心的状態を描寫して、主人公の内的生活、及び思想の明晰なる、一定不易の描寫を與へる事にある。も一つの藝術的方法は、人生の動搖する方面と、恐怖する方面、審美的方面、現實的方面を力強く、對照せ

しせめて之を並列するのにある。

「マルメラドフは、死期に迫つて已に半ば無意識の状態に沈むて、乞食の様な様子をした、自分の子供等を見廻す。彼の眼は、彼の特別の氣に入りである小さなリドチユカの上に止まる。リドチユカは『子供らしい据わつた吃驚した眼で彼を見つめて居る』あゝ、と彼は明かに何か云ひた相な様子をして、心配相にリドチユカの方へ身を動して聲を出す『何ですか』カテリナ、イワノフナが叫ぶ『可憐相な小さな裸足』と彼は小娘の裸足に指して、半は了解した様な顔色をして咳く。其處へ一人の坊様が食物の賜を以つて入つて来る。白髮の老人である。外の者は皆退席する。懺悔は長くかゝらない『カテリナイワノフナと子供等は跪く、彼等は祈をして居るのである。その瞬間に其處へ人込を分けて音も立てないで、おづ／＼と、一人の若い娘が入つて来る。此の娘が乞食や襤褸や、死や、絶望の眞最中に此の室に突然現はれて來たのが、妙に此の場所に釣り合はない様に見える。彼女もやはりぼろを着て居る、その着物は穢ない、併し色は

大變派手な色で、往來でも人の眼を引く様な意匠である。彼女の全體の様子には生れつきの自然な感情の優しさと、心操の氣高さと外部の目的を耻づる色とが現はれてある様に思はれる『マルメラトフの娘のソニヤは茲には最も不似合な光々した絹の着物を付け馬鹿々々しい長い裾を引きずり、ピカ／＼磨いた靴をはき、火の様な色の、いやな派手な、羽を飾つた圓形なおかしい麥藁帽子を被つて居る』斯う描寫した後で作者は又突然臨終の人に立もどつて、懺悔と最後の聖餐の事を描いて居る。

此の様な現實と神秘の對照は、ドストイェフスキイの小説には斷えず出て來る。或る時は讀者はセンナの木蔭深き小路に入り、又或る瞬間には夏の塵と暑さに浸つて居るペテルブルグに居る。或は又其地方の警察署の光景となるかと思へば、その次の瞬間には又此の貧窮と放蕩との眞最中に於ける光景となる。次の瞬間には我々は忽然として、毎日出會馴れて居る、大都會の灰色な些細な光景が、不意に夢幻的のものになつて、次第に夢の様に消え失せて了ふ。作者

の心は暗黒、秘密、汚濁の感覺を以て貫かれて居る。此等のものは人間生活の深い底に潜んで居るものである。彼は微細な事件の暗合と云ふ不斷の流れによつて、運命の悲劇的要素を故らに其物語に引き入れる。

ラスコイルニコフは犯罪を執行する前に、或る宿屋の玉突場で、二人の見知らぬ人が、彼の目的として居る犠牲者たる金貸婆さんの事を、話して居るのを立聞する。殺人の各計畫、殺人行爲を辯護する總ての道德的動機は、恰も運命の神様が説明して呉れる様な、細かな點迄、詳しく彼に説明される。實際の事實は意味のない、つまらない事であるが、ラスコイルニコフの決心の上には、非常に大きな影響を持て居る。それは純然たる偶然の機會である。その頃或日彼は疲勞しきつて早く家に歸りたいと思ふて、併し何の爲であつたかよくわけが分らないで、非常な廻り路をして何處を何して來たか、センナに來て、其處で一人の百性と老婆の召使のリザベタが話しをして居るのを立聞する。百姓が或る用事で彼女に面會する約束をして居るのである。『それでは明日の七時』お

婆さんはきつと一人ぼつちになるであらう、彼は自分の全身を通じて『もう決心の自由が無い、自分の意志と云ふものはない』、殺害は今や避くべからざるものとなつたと云ふ事を感じた。此も亦單純なる偶然の機會である。彼は自分の室に歸つて、最後の準備をする、斧を外套の内側の輪に掛ける、さうすると不意に戸外で誰か『もうとうに七時を過ぎた』と叫ぶ聲が聞える『あゝ疾くに過ぎたか』と叫んで、彼は往來に飛び出す。作者は茲で斯う云つて居る。『ラスコイルニコフは近頃非常に疑深くなつた、此頃は常に奇怪な兆候や、不思議な事、或る特種な力とか、暗合とか云ふものの表はれを發見して居る』。單純な偶然の機會が彼を犯罪に引き込むのである。『彼は機械の輪に彼の上衣の一端を捕へられた、その輪は今やそろ／＼と彼の全身を其係蹄の中に吸収するのである』。此の偉大なる現實家は同時に又偉大なる神秘家である。ドストイェフスキイは現實が如何に夢幻的であるかを感じて居る、彼にとつては人生は只一つの現象に過ぎない、外部を掩ふて居る覆物に過ぎない、その下には了解すべからざ

る、永久に人間の心から隠されて居る、或るものが、隠されて居るのである。彼は殆ど故らに夢の國と現實の境界とを消失せしめやうとして居る様に思はれる。後になつてからはつきりと生きて居るものになる或る人物が、始めは霧の中から出て来るやうに夢幻の間から浮び出て来る様である、例へば往來でラスコイルニコフに大聲で『人殺』と呼びかける見知らぬ百姓の如き人物はそれである。翌日になると此の百姓は彼にとつては幻か夢想であつた様に思はれる。併しそれから又此の男は生きた人間となるのである。此と同じ事がスウイードリガイロフの始めて現はれる時にも起る。此の半ば夢幻的な人物は後には眞の實在的の人物になるが、夢幻の中から呼び起された様に思はれる、不思議な百姓の存在を信じない様に、彼の實在をも信じないラスコイルニコフの病める幻想の中から呼び起された様に思はれる。彼は其友のラズミヒンに、スウイドリガイロフの事を探ねる。

『君は本統にあの男を見たか、明かに見たか』

『うん、はつきりと見た、千人の人中でも、彼の男を見分ける事が出来る。僕は人の顔はよく覚えてゐるからね』

『ふん―併し』とラスコイルニコフは口訥りて『ねえ―僕はあの男は幻影に過ぎなかつたのかも知れないと思ふのだ、僕は氣が變になつて幽霊を見たのだと思つたのだ』

此等のドストイェフスキイの作の戯曲的特色は、日常の周圍の事情を描寫して居るに拘はらず、雷雨の時の物すごい電光にも比ぶべき、一道の暗黒な陰鬱な、しかも、人の心を引き付ける色彩をその描寫に與へるのである。又我々が今日迄その存在の意義に就ては何等の概念をも懷いた事のない、人生の最も普通の些事の内にも深さと神祕があることを我々に示すものである。

ドストイェフスキイの物語に於て古典的の意味にて悲劇的哀傷を生ずるのは、我々の運命に偶然の機會と云ふものが現はれる許りでない、同じ効果はやはり古典的意味に於ける時間の統一と云ふことに依つても成し遂げらるること

が出来ゐる。僅か一日の間に、時としては僅か數時間の間に、種々な出来事や、大破裂が一つ又一つと、速に踵を接して起つて来る。ドストイェフスキイの小説は平和に威儀堂々として發展して行く叙事詩ではなくて、五幕の中に一群の悲劇が集合したものである。ドストイェフスキイの小説には、徐々として併しどつしりとして進んで行く發展は無い、總てのものが殆ど一瞬間の間に起り、抵抗すべからざる勢を以て狂熱的に一目的即ち終局に急いで行くのである。

彼の作の戯曲的要素に與へられたる行動の迅速と偏重とは、必然にドストイェフスキイをしてセルヴァンテス及びゴンチャロフの様な、一層平靜な叙事的詩人の様に、社會若くは人間生活の些事に多くの注意を拂はしめることを阻止してゐる。内的修養、人生の個人的方面、及び人道的方面、人間存在の日常の過程等は、六十年代に於て罪と罰を讀んで改造さるゝよりは、もつと明瞭に、充分に、西班牙に於て描かれたるものとしてはドンキホーテ、革命前の露西亞に於ては、側面觀に於て拾ひ集める事が出来る。併しドストイェフスキイの描いた

都會の風景は決して看過することの出来ないものである。彼は輕妙な筆致を以て、決して景色の全體を與へず、只輪廓のみを示して極めて微妙に描き出してゐる。時としては僅々二三語で暑さとか、タールの臭とか、材木、煉瓦、煙とか又ペテルブルグの住民にはよく知られて居る奇妙な夏の臭と云ふ様な事を云つて、驚く可き明晰を以つて、我々の幻像に大都會の印象を呼び起すのである。實際上の叙述は何もなくとも、讀者は彼の小説の各頁に於てペテルブルグの感じを持つのである。

只折々その背景を強く表はし調子を高くしやうとする時は、その輪廓に一層きつぱりした筆をそへるのである。『空には一點の雲も無かつた、水はネバー河には餘り見る事の出来ない深綠色を以つて染められた、教會の圓屋根は……美しい大氣を通して、その裝飾の細かい點を、一一はつきりと見る事が出来る程きらくと輝いた……彼は此の壯大な一幅のパノラマを見る毎に、全身に説明の出来ない、冷たい惡寒が血管を走るのを感じた、彼は此の立派な繪の様

な光景には沈黙せる、ものを云はない魂が浸み込て居る様に思ふたのである』茲にもう一つの動機がある。『自分は冷たい、灰色の、暗い秋の夕暮に、可哀相な人々が、總て綠色に、青白く病人の様に見える、あの變化の無い濕つぽい灰色の中で、バレル、オルガンに合せて歌を歌ふ様が好きである。それよりも尙好きなのは、雪が風にも動されなくて眞直に大地にふり……その隙間に瓦斯燈がちら／＼輝いて居るのである』時としては或る晴れた夏の夜に、此の悲しい散文的な都會も、數分間の靜かなおとなしい夢幻の優しさに輝くことがある。此の様な夕にはラスコイルニコフは、『夕日の最後の薔薇色の筋や、段々濃くなつてゆく夕暗の中に、突出して見ゆる一列の家並や、左側の屋根の眞上にある、一つの特別な小さな窓を見詰て居た、此の窓はその瞬間太陽の最後の光線を反射した光に照されて居る、その光線は暗くなつて行く運河の水面から徐々と消え去つて行く一瞬間此窓を照してゐるのである』ドストイェフスキイの描寫には、驚くべき程美術的な筆致がある、例へばラスコイルニコフが殺人を犯した

室に入つて行く時に、『大きな圓い銅色した月が窓から眞直に覗き込んで居た』
『何たる静けさがあの月から来るか』と彼は考へた。

ドストイェフスキイは都會の詩を知つて居る。彼は大洋の曠きからインスピ
レーションを受ける多くの詩人の魅力と神祕の要素を、首府の騒の中に於て發
見して居る。彼等はさら／＼と葉擦の音する『大きな森の中に』人間から脱れて
隠れ家を求める。併しドストイェフスキイは獨り大都會の街々を逍遙ひ歩くの
である。詩人等は星の輝く空を見つめて言問ひたげな顔をする。併しドストイ
エフスキイは、無数の電光の閃めきに照された、ペテルブルグの秋の暴風雨を
冥想しながら眺めてゐるのである。森の中に、海の邊に、廣闊なる天堂の下に
總ての人は神祕を見出し、自然の偉大なる空虚の魅力を感じた。併しドスト
イエスキイの他に、我々の悲しくも散文的なる都會に於て、人間生活の深き
神祕の存在を感じた者は一人もないのである。都會の詩は之を林、海、或は星
の輝く大空の詩に比し、その偉大なる點に於ても神祕なる點に於ても決して劣

らない事を我々に示したのはドストイェフスキイが始めてである。

『三』

『彼女を殺せ、彼女の金を奪へ、而してその金の助に依て汝の全生涯を人道の
爲めに獻げ、一般の善の爲めに盡せ、何故汝は躊躇するか——一つの小さな犯
罪は、幾千の善事に依つて充分に償はれぬか、一人の生命の代りに、一千人の
生命が破壊と滅亡から救はれるのだ、一人が死ねば——それからそれはそれに代る
べき百人の命がある、お前の爲めには數學もあるのだ。此の肺病の悪婆の命は
秤にかけて何程の重さがあるか、蛾や甲蟲よりも重みはなからう——實際それ
程の重さもない、何故なれば此の老婆は甚だ有害だからである。あの悪婆は人
の命を貪つて居るのである』此の様な言葉で運命の女神は見知らぬ學生の姿と
なつて、不決斷の運命に迷つて居る瞬間に、自らラスコイルニコフを誘惑する
のである。『あの老婆は怪物である』——彼は其事を考へて居る——老婆は……

：恐らく間違だ：：：只病氣なんだ：：：私は早く恢復しなければならぬ：
 ：：私は人間を殺さうとして居るのぢやない主義を殺さうとして居るのである』
 彼の犯罪は主義の犯罪である、詳しく云へば彼の犯罪は個人的の動機から起るものでない、通例最も有りふれた法律に違犯する事より起る利己主義の感情から起るものでない、一個の理論的觀念から生じたものである。斯の様な觀念はその實際的價値は如何なるものであつても、兎も角利害を没却して居るものである。法律を振り廻はす伶俐なる走狗のポルフィリイは完全に此の事を知つて居る『時としてはそれは陰鬱な空想的な衝動である、時としては急激な觀念、一時の思ひ付である、：：：或は又書物、又は激越してゐる精神から生れた理論に刺戟された空想であることもある。それで彼等は主義の動機から人を殺すのである、此の理論的の刺戟より犯罪した事がラスコイルニコフの境遇の總ての恐怖、悲劇を成して居る。彼の經驗し得る唯一の後悔は彼の罪跡を悉く隠す必要を感じた事である。彼に取つては之より以上眞實なる後悔は一つも無い

のである。何故なれば殺人を犯した後でも、悔恨が彼を待ち伏して居る時には、彼は犯罪を正統と認むる固い信仰を持續して居るのである。『彼が自白しなければならなかつた唯一の犯罪は、彼がその仕事をよく仕遂げなかつた之を拒否した而して殺害を自白しなかつた事である。彼は主義を殺したのである、故に彼の罪惡ば重い、少くも盜賊と云ふ様な普通の利己的な犯罪よりも一層複雑で、之よりも救治し難いものである。何故なれば、彼は普通の犯罪を幸福の事と夢想して居るのである、『僕のあなたに話す事を御聞なさい——彼はその様に白狀して居る——若し私が唯餓てゐると云ふわけて彼女を殺したならば——僕は今——幸福でせう、それは如何云ふ意味だか考へて御覽なさい』
 人間の情熱中最も抽象的で疲れを知らない破壊的なものは空想である。觀念の情熱である。それは偉大なる制慾主義者をして總ての惑に破れず、彼等の魂を飽足させ、殆ど超自然的の力を與へる。衝動的に迸出する他の情熱の炎に比較すれば、著實ではあるが克つことの出来ない空想の熱火は、炎をあげて燃ゆる

薬火と、白熱の金屬とを比較する様なものである。人生の現實的方面は、狂熱者には、只の一瞬間の完全なる満足は勿論、一時の平安をさへ與へる事が出来ない。何故なれば彼は捕へ難き目的——理論的理想を生活の中に顯現しやうとする目的を追ふて居るからである。そして此の目的を達する事が不可能であると云ふ事、人間の情熱を絶滅しやうとつとむるも到底絶望なる事を、充分に覺れば覺る程、此等の情熱は益々激しく彼のの心中に起つて來るのである。ロペスピエールやカルヴインの様な人々の狂熱の中には、眞に恐ろしき殆ど人間業とは思はれない或物がある。彼等は何千と云ふ無辜の人民を神の名に依つて火刑に處し、或は自由の名に依つて斷頭臺に送る時、又は恣に同胞の血を川の如く流す時も、彼等は中心より自分を人類の恩惠者、正義の偉大なる實行者と考へてゐるのである。人間の命も人々の苦痛も彼等に取つては何でもない、彼等に取つては理論と論理の形式とが萬事である。彼等が人道と云ふ森の中を貫いて、血に穢れた道を切り開いて行く様は、恰も鋭利な剛鐵の機械の切先が、頑

強に、冷靜に、生きた體の中を突き通して行く様なものである。

ロペスピエールやカルヴインやトルケマダ等の如き人間を包有する此の觀念の狂熱の型に、ラスコイルニコフも亦屬して居るのである——彼の性質の全體では無いが、彼の性質の一面はたしかにそうである。

彼は大狂熱者の一人になりたいと望んでゐる——それは彼の理想である、彼は疑もなく、此等の人と共通なる多くの特質を持つて居る。彼は彼等と同じく自分勝手な性質を持つて居る、彼等と同じく人を輕蔑する心を持つてゐる、論理的結論に導く同じ鋭利なる推理を持つて居る、此等の結論を實生活の如何なる目的にも應用しやうとする同じ心の傾きを持つて居る。同じ禁慾的情熱と、陰氣な狂熱的熱心と、同じ意志と、信仰の力を持つて居る。罪を犯した後でも、精力が盡き果て失敗の縁に立つて居ながらも、彼は尙彼の觀念を信仰し、彼の理想の壯大美麗に心酔して居る。その時私の生涯に始めて外の何人も今迄自分に暗示して呉れなかつた一つの考が浮んだ、誰も暗示して呉れないものである、

我々を取り圍む妄誕無稽の慣習を突き破り、凡てのものを全く單純に見て、之を惡魔の許へなげ出すと云ふ事を何人も敢てした者がない、又今日も敢てする者がないと云ふ考が忽然として太陽の如く明かに自分の頭に閃いたのである。そこで私は……左様する勇氣を得たいと思つた——そこで私は彼女を殺した……只私は敢行したいと望んだ丈である……それが私の唯一の理由であつた、私が金の必要があつたと云ふのが第一の理由では無かつた、私はそれ以外の或ものを確めなければならなかつた。私を説きすゝめてその行爲をなさせたのはもう一つの他の動機であつた、自分はその時そこで自分が他の總ての人の様に臆病者であるか、又は一人前の男子であるか如何かと云ふ事を、直ちに見出さなければならなかつた、自分は罪を犯す丈の勇氣があるだらうか、無いだらうか、自分は敢て身を屈して金を取るべきであらうか、取るべきでないだらうか、自分は頼ひ迷つて居る生物に過ぎないであらうか、或は又自分の行爲は正當であらうか、自分は一個の男子であらうか』ドストイェフスキイは此の

良心と憐みの理論的缺乏を、ラスコイルニコフに表して居る。此の缺乏は總ての狂熱者に共通の特色である。『彼の良心は——作者は云つて居る——剃刀の様に鋭利であつた』彼の母も亦その息子を愛して居るに拘はらず、ラスコイルニコフの感情の破壊的勢力を認めて居る。何か抽象的觀念があれば、直ちに此の破壊的勢力に火を付ける事が出来るのである。『あれがたつた十五歳の時に、私はもう決して彼の性質には信用を置かなかつたのです、その時でも私はあれが他の人が決して夢にも思はない様な、亂暴な手段を突然やるかも知れないと云ふ事を信じて居ました、貴君はあれが私の涙や祈禱で動かされると思ひますか、私の病氣や、心配の餘り私が死んで了ひはしないかと云ふ考に依つて、或は私共が貧乏だからと云ふ様な事で動かされるだらうと思ひますか、彼は一言も云はずにどんな障碍にも克ちませう、併しあれが私を愛しないと云ふ事は有り得べき事でせうか、そんな事は出来ませうか』

此の觀念の狂熱と云ふ事は、只彼の性質の一面を形造つて居るに過ぎない、

彼の性質は又柔和及び愛、人類に對する大なる同情、物に感動し易い深い情を持つて居る。

此が彼の主なる弱點で、彼の破滅を惹起したのは此の弱點である。

ラズミヒンは、ラスコイルニコフの中には、二つの全く違つた特質が斷えず代り合つて居ると云つて居るが尤もな事である。彼の一つの身體に於て、二つの靈魂が永久に戦ひながら住んで居るのである。彼は人殺しをやる、それからその犠牲者に對する憐憫の情に類折れてなげく、縦令老婆の爲でなくとも兎に角『優しい穩な眼』をした、リザベタの爲めに歎くのである。併し眞正なる英雄、偉大なる犯罪者、純粹の法律違犯者は歎かない、憐憫の情の爲めに悶えることがない。カルヴインやロベスピエールやトルキマダは、一つも怪しい苦痛を感じなかつた——そこに彼等の強みがあるのである、彼等は全く無感覺なので大きな花崗石の一片から刻まれたのではないかと思はれる。然るにドストイェフスキイの主人公は、その二重の性格に於て、彼自身の意志の罅隙の中に、彼

の内部の弱點の根元が、永久に存在して居ると云ふ事を裏ぎりして居る。彼は自分で彼の破滅となつた此の弱點を完全に知つて居る。『否あの人々は此の様に作られては居ない、その人に總てを許さるゝ様な眞正な統領的精神の人物は、ツィロンを威嚇する人である、巴里を荒廢せしめる人である、埃及軍隊を導き、莫斯科からの歸途に五十萬の生靈を浪費する人である、ヴイルナに於て伶俐な洒落を云ふ人である、それで死ぬ時には彼の爲めに偶像を建てしめる人である、それは總ての物を完成しつゝあつたのである、彼に取つてはどんな事でも許されたのだ、否、實際斯う云ふ人は肉體を持つて居ない——彼等は青銅で造つたものである』

犯罪を遂行してからラスコイルニコフは、驚きあはてる。それは彼の手が血で穢れて居つた事を發見したからでなく、又彼が人殺しであると考へたからでもない。併し彼はその犯罪を考へて一寸躊躇した、而して『自分が犯罪者であつたか』と自問したからである。『此の躊躇は弱點の標であつたのである、而して

彼の意見では法律を破る権利を持つ人に似合はないのである。『であるから——自分は臆病者である……と彼は齒を食ひしばつて咳く——自分は打たれた犬よりも墮落した厭ふべき人間である、自分は絶えず彼女を殺した後で、それを承認しなければならぬと云ふやうな氣がして居つた。一體此の様な恐怖に比べ得るものが此の世の中にあるだらうか、あゝ何と云ふつまらない臆病者であるか、今にして私は馬に跨り、劍を抜いて、アラト神の名を呼び、自分は「心定らぬ生物」であると告白する豫言者の性質を覺る事が出来る。眞に、眞に、彼は街を横斷して強力なる砲列を布き、罪なき者にも、罪ある者にも、同じく發砲して、自分の行爲に就ては説明を與へる事を許さない「豫言者」である。お前をか弱き生物と白狀せよ、お前がそれ程不適當である事を望むとを止めよ、自分は此の恐ろしい老婆から何物も決して求めまい』若し法律の大違犯者にして彼の魂の中に彼等の觀念の我儘なる情熱の中に、人間らしい感情の要素を幾分でも持つてゐさへしたら、我々は彼等に對して同情を表する事が出来る、青

銅で出来た人間であつても、若し彼等の心の一小隅が生きて居さへすれば、我々は同情を寄せる。一つの良心の叫びは如何に微かであつても、彼等をして目を覺させ、事理を了解させ、又滅亡させるに充分である。

バイロンは「コルセイア」「チャルイド、ハロルド」「ケーン」及び「マンフレッド」に於て新らしい人、新らしい英雄的靈魂を創造した。彼の時代に於ては大氣は此の種の萌芽に満たされてゐた。その性格を此の詩人は、斯の如くして如何に彼の描寫の中に表現すべきかを知つて居たのである。

スタンダールの大小説なる「ル、ルージ、エ、ル、ノアール」は不幸にして靈西亞に於て殆ど知られて居ないが、其の主人公ジュリアン、ソレルはバイロンの影響は少しも受けず全く獨立して創造された物であるが、その本質に於てはバイロンの主人公と双生兒である。

十九世紀の文學を満たす主人公等の根元であるマンフレッドとジュリアン、ソレルとは、その枝が我々の時代迄延びて居る複雑な系譜的樹木の二個の相分離

せる小枝を形成して居る。

此等の主人公が共通に持て居る性質は、彼等は皆社會から追放されたものであると、調和し難い不一致と、人々を奴隷であると云つて侮辱した爲め、社會から隔離されたものである。民衆は此等の追放者を憎悪する。此等の追放者はその代り民衆に非難される事を誇りとして居る。彼等には何處か虎の様な獍猛な所がある。人間嫌な所がある。それと共に又主宰者たる色がある。彼等は驚が近づき難い絶壁に巢を作る様に、世人から遠く離れて、寂寞たる高所に居を占めるのである。

彼等は壓制された者に對する獻身的同情の念に動かされて生涯を始めるが、屢無辜の血を流す事に終る事がある。ジュリアン、ソレルは自分の愛する女を殺す。人間の血を流す事や、其他種々の犯罪は、「コルセイア」「マンフレッド」及び「ケーン」の良心を痛く壓迫する。彼等は皆法律の違犯者である、未だ認識されない英雄である、「然し彼等には其の良心に血を流す事は許されて居る事である」

ある』

私はバイロンの作品とドストイェフスキイの小説の間に何等の連絡を認むる事が出来ない、此の場合一方が他の一方に少しの影響も及ばさなかつたと云ふ事は疑がない。而も——我々が我々の時代に於ても、我々自身の社會に於てさへも出遇ふ所の型の一大實例である『ハムレット』の性格に於けると同じく——マンフレッドとラスコイルニコフの二人も彼等の性質に或る世間的な所と、人性の永遠的、根本的原則と接觸して居る所を持つて居る——此の三要素は變化多様の事情に於て此等の型の人々に於て繰り返へさるゝのである。

ドストイェフスキイの主人公にも同じ民衆の憎悪がある、同じ社會に對する狂熱的反抗がある、此等はバイロンの型の人間にも發見されるのである。彼は支配者たる超人が粉碎する権利を持つて居るほんの蟲けら同様の者として、彼等を輕蔑する。血を流しても彼は自分を有罪と認めない、單に誤解された者と見て居る、ソニヤが彼に悔改を勧め、苦痛を受ける事をすゝめ、犯罪を白狀する

を勧めた時に、彼は傲然として答へた『ソニヤよそんなに小供らしくするな：：：私は彼等に對して何の罪あるか、何故私は彼等の所へ行かなければならぬか、そして私は何を云ふのか、それは新たな幻想に過ぎないのだ、別の想像に過ぎないのだ：：：彼等は自分で何百萬と云ふ人を殺して、それでも彼等は善人だと思はれて居るのだ、彼等は皆ならず者だ、悪漢だ、ソニヤよ私は行かない、何の道何を私が云ふのだ——私が彼女を殺してその金を取る勇氣さへ無かつたと云ふのか、何故かつて彼等は、私を嘲笑して云ふだらう、それを取らないとは何と云ふ馬鹿だらう、何と云ふ臆病者だらう！ソニヤよ彼等は只だ一言も了解しないだらう、彼等は了解が出来ないのである、何故私は行かなければならないか：：：私は行くまい』若し人の全生涯が一つの連続した困苦と不眞實である時には、囚襲的道德は英雄に取つて何であらう？

『犯罪？：：：何の犯罪？：：：獄道、悪心の古狸、貧者から甘い汁を吸ひ盡した悪性の老高利貸、あれがした無數の悪業が其の死を大聲で迫つて居るその

高利貸を片付けて了つたと云ふ事實——それが犯罪であるか？そんな事は私の心を悩まささないし、それを流し落さうと思ひもしない』：：：『兄さんそれは如何云ふわけですか、兎に角貴君は血を流したんですよ！』：：：とラスコイルニコフの妹のドニアが苦惱して叫ぶ『總ての人が流して居る血だ！』彼は殆ど精神錯亂に近い状態に激して答へる——『その血は世界に於て彼等がシャンペンを瀧の如く注ぐ様に流されて居る、今迄も絶えず流されて來たのだ。その血を流したと云ふので彼等はジュピタアの殿堂で王冠を與へ、彼等を人間の恩恵者と呼んで居る：：：人民に爆裂弾を投げる事が正規の包圍攻撃をする事よりも何故價値がないか、私には少しも譯が分らない、美的恐怖は弱點の第一の標である』彼の殺人は社會が自ら許して勝手に行ふ法律上の殺人程立派なもので無いと同時に、又其程罪あるもので無い。此等の卑劣なる、此の卑怯なる獸類の群は若し成功さへすれば、彼等を塵の如く追ひ散らすとの出来る英雄を、大膽にも審判しやうとするのである。『一體』と彼は不意に感情が激して來て大聲

で叫ぶ『此から十五年か二十年の内に、私の精神が全く怖氣がさして、人々の前に恐る々々平伏して、私は普通の強盜に過ぎませんと、白狀する様な事が有るだらうか、ほんにさうだ、彼等が今私を流刑にしようとするのは之が爲である、此の外に仕方がないのだ、彼等が往來で私の前や後に立つて、私の云ふ事を一生懸命にきいて居るのを見よ、何と云ふ申分のない臆病者で、何も此も皆本當に泥棒であるのを見よ、否——此よりも悪い——何と云ふ馬鹿者共であるか見よ、それでも彼等は私を正當な流刑で處分しやうとする、彼等は總て公憤して立ち上るだらうお、實に憎むべき奴等だ！』

彼の性質の中の強奪的に傲慢な分子は極端迄喚び起されて居る、彼が精神を集注して人を憎む事はバイロンの主人公よりも優つて居る。

併し彼等の様にラスコイルニコフも亦折々彼が人類を愛して居る事、彼の親切が退けられ、誤解された事を公言して居る。彼の知つて居る唯一の愛は書籍の上の愛で、マンフレッドやジュリアン、ソレルのそれに似た、冷かな獨立的

な愛である。『彼自身に對しては彼は意志の力を望むばかりである、バイロンの主人公の如く彼は貧しくして居つても、窮乏しても骨髓迄も貴族的である、彼の誘惑的美貌にも亦權力の標象がある。

此の燃ゆる様な黒い眼と青白い顔色をした優美な、教養ある青年は、有らゆる人に尊敬を拂はせ、時として迷信的畏敬を起させるのである。單純な人々は彼に魔力的性質があると稱して居る。ソニアは云ふ『神様は彼を惡魔に渡したのです』ラズミヒンは多數の人から引き込まれて、ラスコイルニコフが悪いと云ふ事を認めながら、尙彼の前には平伏し、彼の面前に出ると殆ど震へて居るのである。バイロンの主人公の一人の様に、彼は力のヘルキュールスであつて、無限の潜勢力を蓄へて居る。併し彼はその潜勢力を利用しない、何故なれば彼は單に夢想的で、その性質に實際的の所が少しもなく、實行を輕蔑するからである。

彼は寂寞を愛する『それから私は蜘蛛の様に片隅に身を埋めた……お、私

は何れ程あの泥穴が嫌いか！それでも私はその中から出まい、わざと！』
 彼は失敗した後でも自分が救われた様に思はない、總てが彼に反對して居る時に、もう逃れ路が無く口供と自白をする爲に警察に行く時に、彼の自信が始めて強くなり、彼は恐ろしい自信の力を得て『今私は今迄よりも尙自分の犯罪が何であつたか分らくなつた、此の瞬間よりも私が強く自分の無罪を確信した事は今迄決してない事である決してない事である！』

妹を慰めてその涙をなだめてやる爲めに、彼は昂然として云ふ『私の爲めに泣くな——縦令私は人殺であつても男らしくしやう、生涯正直にしやう、お前は何時か私の名が話に出るのを聞く事があるだらう、私はお前を耻かしめる様な事はしない……お前は分るだらう、私はお前に見せてやる併し——』

併しラスコイルニコフの中には、もはや空想は何にも残されて居ない、彼の眞の魂はその深さを探る爲めに、容赦なき心理的解剖に附せられて居る、彼を理想化すると云ふ事は、もはや問題になつてゐない、翼の生いた靈魂、「コルセイア」

又は兎も角も英國の貴族の代りに、我々は眼前に學資缺乏の爲めに餘儀なく大學を去り、殆ど乞食になつた、一人の貧書生を見るのである。

作者は彼の弱點を隠さうとか、飾らうとか云ふ考は少しもない、彼は自負と寂寞を愛する事が、如何に犯罪の結果となつたかと云ふ事を示して居る。その犯罪は、ラスコイルニコフが彼の同輩に對して、特種の權力又は勢威を持つて居るからではなく、寧ろ愛と人生の智識不充分から起つた事を示して居る。今日迄壯大なる而して不思議に陰氣な英雄と思はれた彼は、彼の足場から引き下されて榮光の冠を失つて了つた。「コルセイア」と「ジュリアン」は徹頭徹尾永久に人を欺き彼の主張の正しい事と強い事とを單純に信仰して居る様に描かれて居る。併しドストイェフスキイの主人公は己に躊躇して自分の正しいか如何かと云ふとを訝つて居る。他の者は和解せず死んで了ふ、併し彼に取つては此の誇りとする孤獨と人類から隔離する態度は、一時的の危期、新たなる世界觀に移る過渡に過ぎないのである。

彼は宗教的情操を嘲笑する、それでも尙眼に優しい涙を浮べてポリチュカに彼の爲めに祈をし、彼の従僕のロヂオンの爲めにも供養をして呉れる様にと頼む。又優しく彼は斯う自分を消して了ふ人のみが愛する事の出来る愛し方——同情から愛した彼の許嫁を思ひ起す、『彼女は本當に醜くかつた……あれの眼には。私は何故あれに此の様に愛著したか本當に分らない、私はあれが何時でも病氣であつたからと思ふ……が若しあれが跛足で尙^{せむし}儂であつたにしても尙私は益々あれを愛したに過ぎないと思ふ……あゝ私がそれに敗けたのは何と云ふ狂氣じみた事であつたらう』ラスコイルニコフの小供の時の記憶が眼の前を過ぎて行くにも、彼は不幸なる疲勞したる人間に對して、同じ同情を覺えるのである。ある酔どれの百姓が大きな重い荷車の可憐さうな馬を残酷に虐待して居る、馬の後から走つてついて歩いて居る男の子は急いで前に出て、彼等が馬の眼を實際に打つて居るのを見る、彼はわつと泣出す、心臓の鼓動が激しくなる、而して涙が止め度もなく落るのである。百姓の一人が彼の顔を平手でなぐる、

彼はそれを感じない、併し手を握りしめて泣き出し、白い鬢をして頭を振り、事の始から終り迄非難する様な顔付で見詰めて居る白髪の老人の所へ駈けて行く、『とうと彼等は可憐相な小さな馬をたゞき殺して了ふ、それが倒れる、此の可憐相な少年はもう堪へて居る事が出来ない、大聲を上げて、群集を推しのけて唸つて居る馬の所へ行つて、その死んで血に穢れた頭をかゝえ眼に口に再三接吻をする……』

彼は通例傲慢で自負心が強いけれども、ラスコイルニコフは時としては極めて人情に篤いところがある、彼は口供をし自白する爲めに警察へ行く、併し彼の精神の中には悔悟の情が少しもない——只恐ろしき恐怖と全き孤獨の感があるばかりである、彼は不意にソニアの言葉を思ひ起す『四辻の道端にある聖像の前に行つて人々に向つて平伏し貴君が罪を犯した大地に接吻をし、「私が人殺しであります」と世界中に向つて大きな聲で叫びなさい、彼が之を思ひ出した時に身内が戦慄した……彼は四辻の真中で大地に御辭儀をし喜んで、甘んじて、

泥濘の地面に接吻した』

ラスコイルニコフに於て、孤獨なる謀反氣のある、而して社會に對して卒直に反抗をする人格の發達が其の極點——その線を越えては破滅か、然らざれば人生觀の變更か來たさなければならぬ境界線迄達して居る。彼は反抗と云ふ困難な道に出立した、此の路は彼を總ての道德律の否定と、最後には彼に無用な重荷と思はれたもの、或は因襲的偏見と見えるもの及び、少しにても義務の要求を含んで居るもの、否定迄彼を導くのである。『彼は良心に問うて血を流す權利を要求した』彼は人間を成る程奴隸としては見ないが、賤しむべき蟲、若し英雄の進路を邪魔するならば、之を殺さなければならぬ蟲と見て居る。彼の全生涯は此の氷の様な理論の巖石の上に移つて行く、若し彼の靈魂の中に、他の主義が深く潜伏して居るでなければ、ラスコイルニコフはそのもの寂しい孤獨の氣分に於て必然滅亡に赴かなければならぬ。ドストイェフスキイは此瞬間迄彼を持つて行く、其の時に突然彼の中に人間の泉が湧く、此の泉は今迄歴

迫されて居つたが、決して全然涸渇しなかつたものである——宗教的の感情の泉が湧くのである。

作者は西伯利に於ける懲役の宣告を實行し様と云ふ途中の所で主人公と別れる。而して途中彼は神の福音の事を冥想して居る、未だ聖書を繙く勇氣は持たないけれども。

【III】

ドストイェフスキイはラスコイルニコフの犯罪と、彼の時代の社會狀態と、其の時代の思想とを對照して居る。高利貸の婆さんの金の使ひ方を考へて、その老婆を殺した事が、道德的見地から是認する事が出来るか如何かに關して、作者に放たれた批評に答へて、ドストイェフスキイは次の様に云つて居る。『此の様な話題は屢青年の議論の問題となつた、彼は關係が違ひ場合が違つて居たけれども、度々之を聞いた事がある』ドストイェフスキイは此の小説の事件

が起つた時代——即ち十九世紀の六十年代の文學的運動に深く興味を持つて居た。彼は犯罪に關する一論文に於てその感想を發表して居る。此の論文は評論雑誌に出て居た。

『ケブレル及びニュートンの發見が、一人、十人、百人、或は更に多くの此等の發見を妨害したかも知れない人々を犠牲にしなければ、人類に示されなかつたと想像すれば、私はその時はニュートンは、此等の十人或は百人の人々を、彼の發見を全人類に知らせる爲めに除いて了ふ權利否義務があつたらうと思ふのである』

此の様なのがラスコイルニコフの疎漏な赤裸々の理論で出來て居る信條である。此問題はまだ一つのもつと重大なる問題と關連して居る。

それは善惡に就て如何なる標準を立て得るかと云ふ問題でゆる。不變の法則を發見して、一般共通の善を定め、それに依つて我々の行爲に適當な價值を與へる、科學の標準か、若くは良心の聲、神に依つて我々の中に起された義務の

念、智力の援助の必要なき、錯誤なき、神聖なる本能の標準か、換言すれば、科學が此の要求された標準を與へるだらうか、宗教が與へるであらうか？』
人類の幸福と、我々の良心に命ぜられた法則に服従すると、何れが望ましくあるか、共通の善を得る爲めの一般の道德律と云ふものは、多數の事情に適應する様に定めらるゝ事が出来るだらうか？、吾人は如何にして暴力と惡に戰ふべきか？、單に觀念のみによつて戰ふべきか、或は之と對抗する暴力の後援を以つて戰ふべきであるか、我々の時代の悲惨と苦惱とは此問題にあるのである、ドストイェフスキイの小説は、斯う云ふ問題の中心となつて居る柱の周圍を廻つて居るのである。此の様にして此の書は近代的生活の大病弊の一つの權化となつたのである、之は未來の英雄に依つてのみ、解決せらるべきコルジヤンの

綱である。

ラスコイルニコフが、何にも役に立たないルーヂンの命と、貧窮に惱まされた氣高い女のカテリナ、イワノフナ、マルメラドウアの命、と何れが價值があ

るか抽象的な論理的な質問を發した時にソニアは非常に當惑した。

『何故出来ない事をお聞きなさるのか』とソニアは質問をそらして訊き返へす。

『ルーヂンが生きて居つて、何時迄も人を恐れさす方が可いのであらうか、貴女は敢てそんな意見を述べますか』

『私は神様の御心を讀むとが出来ません——何故貴君は人の答へられない事をお訊きなさるのですか、何故こんな無駄な質問を？何してこんな事が皆私の判断を待ちませうか！誰が生きて居つていふ、誰が生きて居つていけないと誰が此處で私に判断させましたか』

ソニアは人生の限りない困難と複雑に麻痺されて居る。ソニアは此の様な問題は良心の聲を抑へて、理論的ばかり解決する事が不可能であると云ふ事を知つて居る。何故と云ふに、實生活に於ける一つの小さな偶然の出来事は、直ちに何百萬と云ふ豫期しなかつた具體的の可能事を現出し、その一つ／＼が抽象的結論を混亂させ無効ならしめ、不合理のものとする事が出来るからである。

『人は一つの論理の方式を以て自然に透徹する事が出来ない』とラスコイルニコフは叫ぶ。『論理は百萬の可能事の中只三つの假定を豫想するに過ぎない』

併しながら、ラスコイルニコフの道徳的數學の信ずべからざる矛盾は、殊に明かに、彼が周圍の人々に及ぼした、犯罪の豫想しない結果に於て證明される。ラスコイルニコフは、リザベタは何の罪がなかつた、ソニアの言を借りて言へば『正直な女で神を見る人』であつたけれども、老婆と一所に殺してもかまわないと信ずる事が出来て居る。彼は『ナイフを以て彼の女に飛びかゝる』……可憐相なりザベタは、只此の主人公が數學的計算に備かばかりの誤謬をしたばかりに死ななければならぬのである。

道徳的に云へば、彼はソニアにすつかり自白をする瞬間に、ソニアも亦殺さなければならなかつた筈である。殊に彼の犯罪の豫想しなかつた結果と云ふのは、偶然殺害をやつたと云ふ嫌疑を受けた百姓が自殺を企てたものである。又彼が老婆の金を以て、スウイドリガイロフの手から救ひ出さうと望んで居つたドニア

が、彼が犯罪の直接の結果として、却て彼の手に落る様になつた。何故と云ふに、スウイドリガイロフは、ラスコイルニコフが眞の殺人者であると云ふ事を発見して、此の秘密を握つてソニアに對し意地悪い勢力を得るからである。而して最後に彼は自分の母が息子が殺人者であつたと云ふ事が分つた恐れと、驚きで、死ぬと云ふ様な事を豫想する事が出来たらうか？

理論的に云へば老婆が生き永へて居ると云ふ事は、無用であり有害でさへある。——彼女を除き去る事は、書いた文句の中の無駄な文字を抹殺する様に、容易く手間のかゝらない事である。併し實際に於ては、誰にも眼に見えて役に立たない各個人の命が、解剖を許さない幾千の眼に見えない糸に依つて、全く關係のない人々の命、畫家ニコルキーの命から、ラスコイルニコフ自身の母の命に迄結び付いて居るのである。それ故良心の聲が彼に『殺すな』と云つた時は全く間違ではなかつたのである。彼は彼の抽象的理論の眩目する様な高さから、彼の衷心の聲を排斥したが、其の聲が又彼に、人は道德の問題を解釋する

時に、何時も論理や常識に山つてばかり導かれる事が出来ないと言ふ事を告げる。心の神聖なる本能が、嚴酷なる病的推理によつて否認される事が、結局眞正なる智識に由つて是認されると云ふ事——之が此の小説の物語の根底に横はつて居る大題目の一つである。

人生に於て最も恐ろしい物は悪ではない、善に對する悪の勝利でもない。何故と云ふに、善に對する悪の勝利は、只一時のものであると考へる事が出来るからである。併し彼の宿命的法則が恐ろしいのである。此の法則は或る場合に於ては、同一の行爲、同一の魂の中に善悪を混亂し、結合し、纏綿させ、終に何れが何れであるか、殆ど區別する事が出来ない様にするのである。悪事や悪徳は、我々の感情に對して、偉大なる魅力を有して居るのみならず、又我々の心の上に大なる詭辯の力を振ふのである。悪の根本的精神は奇怪なる、變則なる、屬性あるに拘はらず、決してメフェイストフィリスの様に悪意あるものではない。メフェイストフィリスは總ての武器の中で、最も致命的な微妙な武器即ち

嘲弄を以て、人間の性質を傷つけ鞭撻する。又彼の最も純潔な、最も光輝ある光なる、實の光を、天の把握から救ふたルヒファアの如く意知悪いものではない。

天使と悪魔の永遠の争は、戰場即ち我々の良心の中で繼續し、戦の最も激烈な極に於ては、我々は二者何れを最も愛するか、二者何れが勝利を得る事を希望して居るか判らない事がある。悪魔は快樂と歡喜を提供して我々を彼に引き付けるのみならず、尙又その見掛けの正し相な正義で我々を誘惑する。我々は今日迄發見されないで居たか、或は誤解されて居た真理の一面を、彼が眞に我々に示すのではないかと疑ひを起す。我々の敬虔なる併し軟弱なる心情はルヒファアの反抗、不従順、不羈に對して、何かそれに應ずる答をしないで居る事は出来ないのである。

平行線に書き出された此小説の主要なる三本の絲、即ちラスコイルニコフとソニアとドニアの戯曲は結局一つの目的——吾人の生存に於ける、善と惡の、謎の様な宿命的の交叉點を、示さんとする目的に向つて進むのである。

ラスコイルニコフは惡手段に由つて善に達しやうと努力する。共通の善の爲めに倫理の法則を破るのである。併しその妹のドニアも亦正に之と同一の事をなすのではないか。彼女はその兄を救ふ爲めにルージンに降服する。ラスコイルニコフが人道の爲めに他人の生命を犠牲にする様に、彼女はその兄を愛する爲めに愛の祭壇に彼女の良心を犠牲にして居るのである。『それは皆私によく分つて居る』ラスコイルニコフは憤然として叫ぶ。『お前が此の犠牲をなすのはお前自身の爲ではない、お前自身の安樂ではない、お前自身の命を死から救ふ爲めでもない、お前はお前が崇拜し、尊敬する人の爲めに身を犠牲にしやうとして居るのである。それが全事件の秘密である——心髓である。お前はお前の兄と母の爲めに身を犠牲にして居るのである。萬事を棄て、了ふのである。お、そんなら必要があれば我々は我々の道徳的感情も亦棄て、了ふのだ！我々の平和、我々の幸福、我々の良心でさへも、何もかも一切同じ様に屑屋の市場に運んで行かう。お前の命を棄て、了へ……我々はジェスイット教徒から教訓を學ん

で、段々我々自身の良心の形式を建設するのだ、そうしてその中には、それが必要であつた、善良なる目的の爲めに眞に必要であつたと、信じて自ら慰める時が来るだらう』

ドニアの間違を明かに認めて居るけれども、ラスコイルニコフは未だ彼女の間違が彼自身の間違であること、彼も亦善良なる目的の爲めに悪業をしやうと決心したことを認めて居ない。『此の結婚は卑怯な行爲である』と彼はドニアに云ふ。『私は悪漢であるかも知れない、併しお前迄さうなつてはいけない……憎むべき奴……私は悪漢であつても妹をさうは呼びたくない、私か、ルーヂンか、何れかを選べ……』

彼は自ら悪漢と稱するも、ポルフィリイは彼を目して殉教者——我々の神ならぬ神の殉教者、その神の爲めには甘じて死なうとする殉教者だと云つて居る。ドニアを卑劣だと云つて非難するラスコイルニコフは、恐らく正しいのであらう、併し此の卑劣には、高度の英雄主義が交つて居る、彼女もその兄の様に半

ば犯罪者で半ば聖徒である。

『ねえ』と決して理想家とは云はれないスウイドリガイロフは云ふ。『運命が貴君の妹を二世紀か三世紀頃に生れて、権力のある或る王侯とか、其時代の大官とか、又は小亞細亞の總督とか云ふ者の令嬢たらしめなかつた事を、私は常々遺憾に思ふて居ました。妹さんはこう云ふ境遇に居ると、必ず立派な男らしい所のある證據を示したてでありませう、而して熔鐵で胸を焦されても、微笑してその苦を忍耐したてでありませう、妹さんは自ら進んで此の苦を身に受ける様にしたかも知れません。而して第四世紀か第五世紀であつたら、埃及の砂漠に出掛けて行つて其處に三十年間も、草木の根を食べて、宗教上の苦行と見神とに身を委ねて住んで居られたてせう。妹さんは誰かの爲めに或る恐ろしい苦しみと堪へしのばなければならぬ、併し其の苦痛も窓から飛び出させる程激しくない様にと云ふ事を祈り求めて居るのですね』

ソニヤ、マルメラドウアも亦殉教者である。彼女は自分の家族を救ふ爲めに

身を犠牲にする。ラスコイルニコフとドニヤの様に、彼女は法律を犯した。愛と云ふ名の下に罪を犯した。彼女も亦悪の手段で善に達しやうと望んで居る。『貴女は大罪人ですよ』とラスコイルニコフが彼の女に語る。『而して重に貴女は無益に身を亡したり、身を犠牲にしたからである、而して貴女が自身が嫌がつて居る此の泥の中に住み、貴女がさうして居つて、他人の爲めになる事も出来なければ、それから自分の身をも救ふ事の出来ない』と云ふ事を充分知つて、(眼を明けさへすれば分るでせう)、貴女が此の泥の中に住つて居ると云ふ事は、一層恐ろしい事である。それだから僕にお話しなさい』と彼は一種情熱に驅られて言葉を續ける。『どうして此の様なけがらしい、卑劣な行が、貴女の中に之と反対な、誠に神聖な感情と、相並んで住むて居るかお話しなさい』

ソニヤに就て同じ談話をして居る間に、彼は話を自分の上に向けて居る——彼も亦全く無益に自分の良心を殺して居る、而して今犯罪の汚ららしい泥の中に住んで居るのだ、彼の身の中にも亦汚辱と聖徒の様な感が相混じて住んで居る。

ラスコイルニコフは彼とソニヤが、同じ境遇に居る事を認めて居る。『我々は手を携へて行かう』と彼は彼女に熱心に云ふ『私どもは三人共罪を非難されて居るのだ、それだから手を携へて行かう!』……『何處に私共が行きませうか?』と彼女は恐れながら溢々立上つて尋ねる『如何して私共が知つてませうか?、私は只我々が同じ道を行かなければならない事を知つて居るばかりです——それは私は確かに知つて居ます——私共は只一の目的を持つてると云ふ事を!』即ち彼の罪を償ふと云ふ事である。『あなたは私と同じ事をなした』と彼は言葉を續ける。『あなたも亦罪を犯した……あなたは罪を犯す事を敢てした!あなたは自分の身に手を下したのだあなたは一つの命——あなた自身の——を滅した自分の命だつて何の相違がありませんか、斯う云ふ境遇でなければあなたは其の精神と智能とを以て、永生する事が出来たかもしれない、あなたは斯う事情が變つて來ると、路上の棄てられものに過ぎないのである。併し此

の様にしてあなたは進んで行く事が出来ない、此の寂寞の中に生活を續けて行つたら、あなたは私の様に狂氣になるでせう、あなたはもう半分狂氣になつて居る様だ、私共は一所に同じ道を歩く運命を持つて居るのです、それじや行きませう！」

ソニヤは罪人である、併し彼女には聖徒の様な所がある、それはドニアに男の様な所があり、ラスコイルニコフに何處か禁慾者らしい所があるのと丁度同じ事である。西伯利の憐れな漕刑者等が、母の様に、救主の様に、ソニアになづ、のも、不思議な事ではない。彼女は窪んだ平和な眼を以て、貧乏で弱つて溫和であるけれども、彼等に取つては殆んど超自然的美の後光に圍まれて居る様に見えるのである。

此の小説には、その頁を流れて居る基礎觀念を説明して居るもう一つの人物が居る——外の何よりも、ラスコイルニコフ自身よりももつと鮮かな色彩を施され、もつと藝術的に描かれて居る人物がある——それはスウイドリガイロフ

である。彼の性格は最も驚くべき對照、最も粗末な矛盾を以つて居る。併しそれに拘はらず、多分その結果として彼は絶対に生々して居る。それで讀者はスウイドリガイロフは、小説の人物以上のものであると云ふ妙な印象を逃れる事が出来ない、何時か彼を知つて居る、見た事がある、その聲を聞いた事があると云ふ印象を逃れる事が出来ない。

彼はその骨髓迄皮肉屋である。

ラスコイルニコフが、スウイドリガイロフが彼の感情を傷け様として居ると思ふて、最早憤怒を抑へる事が出来ず、『止めよ！君の淫猥な野郎な話を止めよ、君は實にいやらしい不品行な人間である』と叫び出した時、スウイドリガイロフは快活相に答へる『お、シラー、我が善良なるシラーよ、誰が此處に道德を期待しやう、そりや君は私に斯う云ふ事を話させて、自分の叫びを聞かうと云ふのだ、こりや面白い事である』スウイドリガイロフの過去には禽獸的な、殆ど妄想的な犯罪者の行爲がぼんやりと見える。その爲めに彼はその餘生を西伯

利に送るのが當然であつた。

併し此の同じスウイドリガイロフは、最も武士的な度量の廣い精神に満ちて居る。彼は最悪の動機に勅戟されて、ドニアを自分の室に誘ひ入れる。彼は不思議な極みなく溢れる愛を以てドニアを愛する。その愛の中には何處か變的な、而して情緒纏綿的な所と、而してもつと高尚な獻身的なる感情が交つて居る。戸には錠がかけられる、鍵はスウイドリガイロフのポケットにある。ドニアは此の様にして全く彼の手に落ちた。それからドニアは短銃を取り出し、一步進んだ銃聲が鳴り響いた、併し弾丸は只彼を掠めて過ぎたばかりである。

『何だやり損つたか！もう一べん弾丸を込めなさい待つて居ませう』スウイドリガイロフは陰氣な顔をして併し微笑をもらして釋かに云つた。『そして貴女が引金を引かない中に私は貴女を捕へて見ませう！』

『打ちやつて置いて下さい』彼女は絶望して叫んだ『私は誓つて又打ませう……私は貴君を殺します』

『宜しい、そうして如何します三歩の所で貴女はきつと殺す事が出来ます、併し私を殺してはいけません、何故と云ふに其時には私は——』

彼の眼がきら／＼と光つた、彼は又二歩進んだ、少女は發砲した——が又狙が外れた！

『貴女は悪い弾丸を貰つて來たのですね、御心配なさるな！未だ外の丸があるんでせう、それを打つて御覽なさい、私は待つて居ませう』

併し彼女は突然短銃を投げ棄てた。

『私を彼方へやつて下さい』ドニアは歎願する様に云つた、スウイドリガイロフは戦慄した。

『それでは貴女は私を愛しないんですね？』と彼は靜かに訊いた——ドニアは頭を振つた——『そして貴女は出來ませんか……決して？』彼は絶望の口調で呟いた『如何しても？』

そこで一瞬間の間スウイドリガイロフの魂の中に恐ろしき暗闘が續いた。そ

れから彼は素早く窓の方へ行てその側に立つた、もう一瞬間が経過した。

『そこに鍵がある、それを取つて彼方へお出なさい、出来る丈早く出てお出なさい』彼はじつと窓から外を眺めて居た。ドニアは鍵を取らうとしてテーブルの方に進んだ。『早く！早く！』とスウイドリガイロフは繰返して云つた。尙ほ動きもせず振り向きもせずして。

早くと云ふ言葉の發言の中には見逃す事の出来ない不吉な響があつた。ドニアは直ぐとそれが分つた。鍵を取つて戸口に駆け付けて、狂氣の様に錠を明けて、室から飛び出した……彼の女が出て行つたら怪しげな微笑が彼の顔に浮んだ——優しき憐れなる陰鬱な微笑——絶望の微笑。

翌朝夜明に彼は自殺して了つた。

ラスコイルニコフは主義の名の下に故意に法律を破つた。スウイドリガイロフも亦法律を破つた。併し主義の爲めではなく、自分の快樂の爲めだ。ラスコイルニコフは惡の詭辯に唆かされ、スウイドリガイロフは惡の誘惑に陥つたの

である。『此の種の墮落には』と彼は云ふ『何處か永久的なもの、我々の本來の性質に根底を持つて居るもの、想像に由つて振ひ落す事の出来ない、我々の血液の一滴、一滴に現存して燃えて居るもの、將來永く幾年も幾年も容易に抑壓する事が出来ない或物がある』

『私は何時でも感じますが』と彼はラスコイルニコフに確言して居る『貴君には何か大いに私に似て居る所があります』スウイドリガイロフも亦人は共通の善の名を以て、法律を破る事が出来ると云ふ彼の理論に直に同情を表する。ラスコイルニコフと長く談話した後で、彼は喜んで叫ぶ『まあ御覽なさい、我々は同じ畠の友だと、私が云つたのは當つて居るぢやありませんか？』彼等は二人共法律の違犯者である、二人共大なる意志の力を持つて居る。二人共彼等は單に犯罪をする爲でない、もつと善事をする爲めに生れて來たのだと云ふ事を深く認知して居る、二人共大きな群衆の中で孤獨で居る、二人共思想家である、二人共日常の生活状態から、何れの方法でか遠く離れて居る。一人は理性の無

い情熱の爲めに、一人は理性のない觀念の爲めに。

ドニアは純潔なる聖徒の様な少女の性質にも、悪や罪が存在し得る事を例證するものである。ソニアの様に彼女も何時でも自分の全生命を犠牲にしやうとして居る。墮落した、零落した人の型であるスウイドリガイロフには、善の勝利の可能が表はれて居る。茲にも亦我々は此の小説の根本動機に出會ふ。人生の永遠の謎、總ての性質に於て善悪が見分け難く混淆して居ると言ふ基礎動機に出會ふのである。

退職官吏のマルメラドフは、到底望みのない醉漢である。彼の娘のソニアは街頭に出て行つて、五六十留^{ループル}を儲ける爲めに、誰でも最初に打つかつた者に身を賣る。家族を養ふ爲めに。然らざれば家族は餓死に迫るのである。

「はい……：：：：：そうして私は其處に酔ひつづけて寝て居ました」とマルメラドフが話す、彼は娘が耻を忍んで儲けた金を飲み盡して了つた、そうして或恐ろしい皮肉な感激をして、小さな娘ソニアの『黄切符』の話を居酒屋で、彼の話を

交ぜ返して冷かす酔どれ仲間^{仲間}に交つて何も知らない赤の他人に話して聞かせる。總ての人を憐れみ、有らゆる人、有らゆる物を了解する神様は、我々を憐んで下さる、神様丈です、神様と運命丈です、神様は彼の大切な日に來て、肺病やみの繼母と、未だ自分一身の始末の出來ない子供等の爲めに、身を犠牲にした娘は何處に居るか、取り所の無い、酔どれの、娑婆氣の離れない父に同情して、その残忍をも物としなかつた娘は何處に居るかとお尋ねになります、そして神様は斯う言ひませう、此處に御出と。そして神様は私のソニアを許して下さい、さうだ神様は彼を許して下さい、神様はきつとあれを許して下さい……：：：：：そして神様は有らゆる人を審判し、有らゆる人を許します、善人も悪人も、賢い人も愚かな人も。そして終に皆をお裁^{さばき}してしまつと、神様は大きな聲で我々に云ひませう。出てお出でと神様は云ひませう、「出て御いで、お前達醉漢も出て御いで、御前達弱い者共も出て御いでお前達放蕩者も」。そして我々は皆一人残らず耻かしながらに出て來て神様の前に立ちませう、そしたら神様は云

ひませう「汝等は豚である、汝等も亦獸の形を取つて、その標をつけよ、汝等は豚！」。そうすると賢い者共は叫び出し、分別のある人々は大聲で呼ぶ「主よ何故貴君は彼をも亦許しますか？」。すると神様は云ひませう「余は彼等賢人を許す、余は分別ある者共を許す、此は彼等の内一人も自分自身に充分に價値あると思はせない爲めである」。そして彼は我々の上にその手を延し、我々は神の前に平伏して泣く……そして我々は何事も了解しませう、その時には我々は總ての事が了解が出来る總ての人が了解する……「主よ御國を來らせ給へ」

此の人の様にどん底迄墮落した者の中に、此程の信仰と愛が潜伏して居るならば、誰がその憐人を『彼は罪人である』と云ひませうか？、ドニア、ラスコイルニコフ、ソニア、マルメラドフ及びスウイドリガイロフ、彼等が善人であると又は悪人であると如何して決定する事が出来ませうか。此のむごたらしい人生の法則から、善惡の避くべからざる混合から、如何云ふ事が起つて來るか『罪と罰』の作者と同じ様に、よく知りよく了解する様になつたら——諸君は彼

等を非難し『見よ此の人は罪人である、其處に善人が居る』と云ふやうな事が出来ませうか？、罪惡と聖とは人間の生ける魂の中に解くべからざる一つの生ける神秘となつて結合して居るのではないか？單に正しいからと云つて人を愛する事は出来ない、神の外には正しい人が無いからである。ドニアの様な純潔な魂の中にさへも、ソニアの様な大なる犠牲の中にも、尙罪惡の種が潜んで居るのである。人は罪人であると云つて之を憎む事が出来ない、何故かと云ふに、人間の靈魂が神聖なる美の閃を保有して居ない程深い罪はないからである。我々の存在の基礎となつて居るものは、善に報ゆるに善を以てし惡に報ゆるに惡を以つてすると云ふ事でもなければ、正義公道の主義でもない、只神の愛と心の優さしい事である。

ドストイェフスキイは人間の苦痛、愚擧、及び罪惡の深さを計つた第一の大現實家である。それで尙自身は依然として福音的愛の詩人である。愛は彼の書の各頁から流れ出て居る。愛は彼の書物の火であり、靈魂であり、詩である。

彼は、我々が至上者の前に立つた時に、我々を正しい者とするのは、我々の行爲でもなければ、我々の衝動でもなく、我々の信仰と愛とにある事を了解した。我々の中に、その生涯罪がなかつた人、或は正常なる罰を受ける様な人は多くあるだらうか？その力、その智能、その智能を誇る人、或はその功績、その正直を誇る人は正しい人ではない。何故と云ふに、此等の者は、總て、人間を輕蔑し、憎悪する事と結合するかも知れないからである。併し主として自己の弱點と罪惡を認める人、従つて殊に同類を愛し憐れむ人は正しい人である。善人であれ、惡人であれ、何か努力すべき事を搜して居る愚か者に畫かれたミコルカでも、亦或は墮落したスウイドリガイロフでも、或は虛無主義のラスコイルニコフでも、或は醜業婦のソニアでも——我々の總ての者が、我々の身の中の何處かに、多分日常生活から遙か離れた處に、我々の靈魂の底深い所に、神の前に人性を證明するに充分なる一つの衝動、一つの祈禱を隠して居るのである。

そして酔どれのマルメラドフの祈禱は『御國を來らせ給へ』と云ふのである。

——(終り)——

モウパッサン論

トルストイ原著
葛西又次郎述

確か一八八一年のことであつたと思ふ、ツルゲネーフが余を訪問した時、旅行鞆の中からメーゾン、テリエーと題した、一冊の佛蘭西語の本を取出して、余に贈つた。

『何時か讀んで御覽なさい。』

彼は氣輕な調子で言つた。一年前に彼はガルシヤインの書いた「露西亞の富」と言ふ本を余に贈つたことがある。ガルシヤインが漸く書き始めた頃である。今度も余に本を贈つて呉れた様子が、其時と同じ様子である。つまり彼は余の

判断に影響を與へることを恐れて居たのであつて、毫も偏頗のない余の意見を聞きたかつたのである。

『これは佛蘭西の青年作者の作です。ザット眼を通して御覽なさい、拙作ぢやありません。作者は卿あなたを知つて心服して居ます。』

ツルゲネーフは恰も余を慰めんと欲するものゝ如く附言した。

『様子を見るとツルジンのことを思ひ起します、ツルジンに似て、立派な息子で、良友で、信頼の出来る男です。加之労働者の仲間には交はり、彼等を教導し、援助を與へて居ます。婦人との關係に就てもツルジンを思ひ起させます。』

斯う言つて、ツルゲネーフは、此の方面に於けるモウパッサンの行に就て、驚くべき、信用の出来ない程の話を開かして呉れた。

あの一八八一年と言ふ特別の年は、余に取ては堪へ難い恐しい年であつた。余は此年、余の全人生觀を根底こんていから改造したのである。其の結果、從來余が全

力を傾注して來た美術なる職業は、吾が眼には啻に曩に重要なりし價値を全然失ひたるのみならず、また美術が是迄自分の生涯に於て、不自然なる位地を占めて居たことを思ふて、嫌惡の情を懐くに至つた。此の不自然なる位地は美術が一般に富豪社會の人々の美術の評價に於て占むるものである。

此の様な次第であるから、當時はツルゲネーフに薦められた様な作物に對しては、余は何等の感興も持たなかつたのである。併し彼を喜ばす爲めに兎に角之を讀んだのである。

それで第一の物語メーゾン、テリエーを讀んで居る中に、其の主題が不穩當にして瑣末なる事たるに拘らず、余は此の作者に天才と稱する一道の光が閃めいて居るのを認めざるを得なかつた。

此の作者は天才と稱する、特別なる天品の能力を持て居る。天才とは切實深透なる注意力であつて、作者の好尚に準じて、彼此の問題に之を應用したものである。此の能力を有するものは、事象に接して、他人の看過したる新たなる

局面を發見して、之に其の注意力を傾注するのである。此の他人の見ざるものを見るの能力は、確かにモウパッサンの有する所である。併し眞正なる文藝上の作品には天才の外に、別に缺く可らざる三大資格がある。余の讀んだ小冊子に依て判斷するに、モウパッサンは不幸にも、此の三大資格の最も重要なものを缺いて居る。三大資格とは他^{ほか}でない。

一、作物に對する著者の矯正的即ち道德的關係。

二、描寫の明晰若くは美(此の二者は同一である)。

三、眞摯即ち描寫したるものに對する愛憎の情の虚偽ならざること。

是である。此等三資格の中、モウパッサンは二と三の兩資格を有して居るのみで、第一の資格は全く缺いて居た。即ち彼は自分の描寫した人物に對し、矯正的即ち道德的關係を有して居なかつたのである。

彼は人生の事象に接して、他人の窺知せざる性質を表現する注意力の天才を有し、言はんと欲する事物を描くに、明晰、簡潔、魔力を以てする描寫の美を

有し、又これなければ作物に何等の力を與へざる、眞摯の徳を有して居る。彼は愛憎の情を偽り粧はざりしのみならず、其の描けるものは眞に之を愛し、眞に之を憎んで居た。が併し、只惜むらくは、第一の而かも最も緊要なる資格、即ち作者の矯正的道德的關係。換言すれば善惡を差別する智識を缺いて居たので、當に愛す可かず、描く可らざるものを、愛し、描き、當に愛すべく、描くべきものを、愛せずして止んで居る。斯くて此の小冊子に於て、著者は男子が女子を誘ひ、女子が男子を迷はす、兩性相誘惑するの狀を描くに、精緻、好愛を以てし、ラ、ファンム、ツ、ポールに於ける如き、了解し難き淫猥なる描寫にさへ及んで居る。而かも一度勞働者を描くや、無情の動物を寫す如く、啻に冷淡なるのみならず、又實に輕侮の情を以て之に對して居るのである。

彼が善惡の差別に對する無識は、ユンヌ、バルチー、ツ、カンペーンと言ふ物語に殊に能く現はれて居る。此は讀者を魅する様な滑稽談であつて、二人の紳士が腕を捲くり上げて短艇を漕ぎ、同時に母子^{おやこ}二人の婦人を誘惑した物語で

ある。

此の物語を読んで見ると、モウパッサンは絶えず悪漢に同情を持つて居る。彼等に唆かされし母、其子たる處女、處女の父、確かに其の處女と婚約ありたる若者杯は、必ず苦き經驗を嘗めたるに相違なきも、著者は彼等の經驗を知らぬ風をして居る、否な彼等の經驗には眼を着けないのである。それで吾人は、憎むべき罪惡が、興味ある滑稽として提示されて居る忌むべき描寫を見るのである。加之、^{のみならず}事件其ものも虚偽に描かれて居る、即ち此の物語の事件は、單に問題の一面を見て居る、而かも其れは最もつまらないもの、無意義のもの、即ち悪漢共の享有したる娛樂に過ぎないのである。

此の同じ小冊子の中にイストアル、ヂュンヌ、フィユ、ツ、フェルムと言ふ物語がある、此はツルゲネーフが特に余の一讀を勧めたものであるが、余も亦特に不快の感を懷いたものである。他^{ほか}でない、作品に對する著者の非矯正的關係が不快で堪らなかつたのである。彼は其の描く凡ての労働者に於て、性慾と

母愛とを脱せざる動物を認むるのみである。されば其の描寫は、讀者に不完全なり、人工的なりとの印象を與へるのである。

労働者の生活と利害とを了解し得ないのと、之を情慾、怨恨、貪婪に依てのみ動かさるゝ半獸半人として描寫するとは、最近佛蘭西作者多數の二大缺點である。モウパッサンも亦此中の一人で、獨り此の物語に於てのみならず、他の凡ての物語に於ても、労働者を主題としたるものは、必ず、讀者の嘲笑を招ぐに過ぎない粗野懶惰の動物として之を描いて居る。佛蘭西の作者は、其國労働者の性質に關しては、余よりも委しく知て居るべき筈である。余は露國人で佛蘭西農民と生活を共にしたことはない、然しながら、佛蘭西作者の如く其國の労働者を描寫するは誤りであつて、佛蘭西労働者は、彼等作者が描いて居る様なものでないことを信ずるのである。吾人の知て居る佛蘭西は眞に偉大なる人物を有て居る。是等の人物は文明の進歩に貴重なる貢獻を爲し、科學、文藝、社會的生活を豊富にし、人類の道德的發展に多大の力を致したものである。若し

此の佛蘭西にして今日も尙ほ現存して居るものとすれば、其肩て是迄偉人の佛蘭西を支持し、今日も支持して居る労働人民は、決して禽獸より成るべきものでない、偉大なる精神的能力を有する人間より成るべきものである。故に、余はゾラのラ、テッルやモウパッサンの諸小説に書いてある様な事は信じない。之を信ずるは恰も美麗なる建築が土臺なくして建つて居ることを信ずる様なものである。佛蘭西人民の道德はジョージ、サンドのラ、ペチット、ファデット、及びラメーア、オー、デアブルに書いてある様な高尚なるものでないかも知れない。併し道德はあるのである。此事は余の深く信ずる所である。モウパッサンの如く、嫉忌、嘲笑のみを以て、労働者を描かんとするは、之を美術家の立場より見れば、一大過失に陥つたものである。蓋し此の如き描寫は、最も不愉快なる物質的方面のみを見て、事物の心髓にして一層緊要なる的靈方面を全然閑却したものである。

之を要するに余はツルゲネーフに贈られた小冊子を讀で、モウパッサンに對

して全く冷淡無頓着になつて了つた。

ユンヌ、バルチー、ツ、カンペーラ、ファンム、ツ、ボール。リストアル、ヂュンヌ、フイユ、ツ、フェルム等の物語が余に非常に嫌氣を催さしめたので、余はル、ババ、ツ、シモンの如き美はしき話や、夜景の敘述の殊に優れたるスル、ロー等に對して一言の批評も加へなかつた。余思へらく、今の世文藝を弄ぶ好事家多く、書籍製造を事とするものは少なくない、實に天才の人は有り餘まる程である、如何に其の天才を應用すべきかを知らざるもの、或は大胆にも其の天才を描寫の必要なきもの、若くは之を描寫するは却て有害なるものに用ふるは既に多きに過ぎざるかと。余はツルゲネーフに斯く告げて、其後モウパッサンの事は全く忘れて仕舞つたのである。

其後誰かに勧められて始めて讀んだモウパッサンの作はユンヌ、ウイー(女の一生)と言ふのであつた。此書を讀んでからモウパッサンに對する余の意見は全く一變し、其後はモウパッサンの作とさへ言へば、何書たるを問はず余は深き興

味を以て之を讀んだ。此作は秀逸の小説であつて、彼が著作中の白眉たるのみならず、ユーゴのミザレブル以後、恐くは佛蘭西小説界の最大傑作とも言ふべきものである。彼は此作に於て、其の描きたる人生に新生面を看破する特殊の熱烈なる注意力、即ち力ある天才を著るしく發揮したるのみならず、文藝上の作品に缺く可らざる彼の三資格、即ち、作品に對する作者の道德的關係、描寫の美、眞摯の三資格を殆ど同程度に現はして居る。此作に於ては作者は人生の意義を最早兩性放蕩者の冒險談にありとせず、題號の示す如く眞の人生を示して居る。潔白、無邪氣なる一婦人が、粗野なる動物的情慾に依て、零落したる生涯を叙して居る。作者は以前の作に於ては、此の粗野なる動物的情慾を人生の中心問題なるが如く取扱つて居たのであるが、此作に於ては作者は常に善の側に満腹の同情を表して居る。

氏が先きの物語に於て發揮したる描寫の形式の美は、此作に於て殆ど完全の域に達して居る。思ふに佛蘭西散文作者にして、此點に至つたものは未だ一人

もなからう。殊に作者は其の描きたる善良なる家族を、眞實に愛し、深く愛し、此の愛すべき家族の幸福と平和とを破壊し、殊に女主人公の生涯を誤らしむる、彼の粗野なる放蕩者は眞に之を憎んで居る。

此の物語に於ける事件と人物とを人生らしくし、記憶すべきものたらしむるものは他ほかでない。氣弱く善良にして虚弱なる母、正直にして氣弱く、人の同情を惹く父、質樸、自然、善良なるものに對する同情を以て、父母よりも更に愛すべき其娘、其の相互の關係、最初の旅行、僕婢、隣人、狡猾、卑しき本能を、慣用手段を以て、伴はり理想化して、無邪氣なる少女を欺く野卑、嬌靡、貪婪にして、氣六つかしく傲慢なる求婚者、結婚、コルシカ、自然の美はしき叙述、夫妻の不實、財産の横領、義父との爭論、善人の屈服、無禮者の勝利、是等は皆錯雜紛糾を極めたる人生自體である。全體美はしく活描せられたるのみならず、各部分共親切、悲愴の調子を以て貫通し、自然と讀者胸奥の琴線に觸れるものがある。之を讀むものは、作者が此女を愛して居るのであることを感ずる。

其の愛するはたゞ外形の美なるが爲めに愛するにあらずして、彼女に宿れる美の爲めに、其靈の爲めに之を愛し、作者が彼女と共に零落し、共に苦しむものであることを感ずるのである。凡そ是等のものは期せずして讀者の心に入り、此の如く美はしきものゝ零落するは何の爲めなるか、零落せざる可らざる因縁ある爲めかと、諸種の疑問自ら起り、讀者を驅りて人生の意義を探るに至らしめる。

作中虚偽の描寫に陥りたる點も散見しない譯ではない、例令ば、少女の皮膚を細寫したる、捨てられたる妻の僧侶の勸誘に従ひ再び母となりし徑路を、要なきに、微細に亘りて描きたる、創痕を蒙むる父の復讐を語りて不自然に陥りたるなどの如きこれである。併し此等の瑕疵あるに拘らず、此作は遂に傑作たるを失はない。余は此作の裏面に於て、先きにモウパッサンの作中に認めたる如き、善惡の差別を知らざる天才ある多言家、戲言者を見ずして、深く人生の意義を探り、既に其の端緒を握り得たる、真面目なる人物を認めたのである。

る。

其次に自分の讀んだモウパッサンの小説はペラミーと言ふのであつた。

ペラミーは姪猥なる作である。作者は此作に於て、縦横に其の欲する所を描き、時に主人公に對する消極的態度を逸して、作者自身を寫すに至つて居る。併し此作もユンヌ、ウイーと同じく、真面目なる觀念と情操を基礎として出來て居る。ユンヌ、ウイーに於ける根本觀念は、男子の野卑なる慾情の爲めに零落の淵に沈淪したる秀麗なる婦人が、残酷、無意義、苦難の生涯を送る混亂であるが、ペラミーに於ては此の混亂に加へて憤怒がある。彼の粗野なる肉慾の動物が、同じ野卑なる慾情の經歷を以て、能く社會に立て好位地を占むることが出来る、其の成功と繁榮とに注ぎかけた憤怒である。此かる主人公が能く成功する其の社會、境涯の邪僻を憤つて居る。前作に於ては作者は、美はしきものが何故に零落するか、其の原因は何處にあるかとの疑問を發し、後の作に於て、之が解答を與へて、吾等の棲める社會にては純なるもの、善なるものは悉

く亡せて仕舞つた、然らざるものも日に亡せつゝある、是は吾等の社會が敗壞し、亂心し、怖しきものであるからであると言つて居る。

結末結婚の場に於て、——勝ち誇れる鄙夫が、名聞の冠に飾られて、己が誘拐したる年長の母、先きには何一つ非難すべきこともなかつた母の子なる處女と當世向きの教會で、監督に祝福され、會衆に承認されて擧げたる結婚——此の觀念は異常の力を以て描かれて居る。姪狼の詳細を描きて（悲むべきことには作者は之を楽しめる如し）作を傷なつては居るが、人生に對する眞面目なる要求は此作にも見られるのである。

老詩人とヂュロアとが、食後色々談話して居る所を、描いて居るのを讀んで見ると、老詩人は、齡若き友人に、人生の眞相を赤裸々に説き示し、吾等の永久の友にして、回避し得ざる伴侶たる、死に就いて次の様なことを言つて居る、死は既に私を取押へ、吾が齒を振ひ落し、吾が頭髮をむしりとり、吾が四肢を蹇へしめ、今や私を一口に其の肚腹の中に葬むらうとして居る。私は既に死の

權威の下に屈從した。死は私が到底彼の手より免るゝことが出來ないことを知つて、恰も猫が鼠を弄ぶ如く、私を戯弄して居るのである。名譽を得ようが、富を積もうが何の役に立つか、之を以て女の愛を買ふことが出來なければ、私には何の益がない。女の愛なければ生も何の價値がないのである。然るに憎むべき死が來て此の愛を奪ひ、此の愛を取りさり、健康と、力と、生命と亦同じやうに亡んで了ふのである。萬人の運命が皆是れである、之を外にして何の運命もあるのぢやないと語つて居る。

併し氣に入る婦人は何人といふ區別なく皆之を愛し、亦愛されたるヂュロアは、情慾旺盛で、生々の氣が充實して居るので、老詩人の言は耳に聞いても心に聞かず、了解して居るやうで了解して居ないのである。彼は之を聞き之を解して居るが、彼れに宿れる情慾の泉は、絶えず迸出して、此の疑ふ可らざる眞理、彼にも同じ運命を預告して居る此の眞理にも、毫も心を惱まさないのである。

人生に於ける此の内部の衝突矛盾の描寫は、諷刺的價值と共に、此の小説の重なる意義を成して居る。之と同一の思想は肺を病んで斃れた雑誌記者の臨終の場合にもほの見えて居る。作者は疑問を設けて、人生とは何ぞ、生を愛する、と、避く可らざる死を意識すると、其の間の衝突は如何に之を決定すべきかと言つて置いて、之に對する答辭を與へて居ない。立止りて之を探ぐるやうであるが、孰れとも決定を與へて居ない。是れ人生に對する作者の矯正的態度の依然として變らない所である。

然るに人生に對する此の道德的關係は、續出せる其の後の小説に於て、漸く混亂を生じ、人生の現象に對する評價は、動搖し、曖昧となり、最近の小説に至て全く邪路に踏込んだのである。

モントリオールを讀んで見ると、モウバツサンは前記二小説の主人公を連結して、同一事を繰返へして居る様子である。當世向きの浴場と、其處に於ける學生等の活動の美はしき描寫あるに拘らず、此處にもユンヌ、ウイーに於て描か

れて居る夫と同じ酷薄なる小人、ポールなる放蕩兒が居る。又ベラミーに於て描かれて居るやうな、欺かれて零落した、柔和にして孤獨なる婦人と、小人との勝利がある。其の思想は同じであるが、其の描寫したものに對する作者の道德的態度は、遙かに下つて居る、殊にユンヌ、ウイーより劣つて居る。善惡に對する作者の内部の評價は混亂し始めて居る、公平なる客觀的態度を取らうとする抽象的願望は見えるが、作者は明かに惡漢ポールに同情を表して居る。さればポールの戀愛論と、誘惑の企圖と、其の成功とは不調和な印象を與へる。作者はポールの惡徳、無識（彼は婦人が自分の兒を懐胎して汚れたりと言つて之に顔を背向け、之を侮蔑した）を示さうと思ふのか、若くは之に反して、ポールの如き生を送る事の如何に楽しきかを示さうと思ふのか、讀者は終に作者の意向を知ることが出来ない。

次で出てたるピエール、エ、ジエン。ノートル、ケール等に於ては、主人公に對する作者の道德的態度は益々亂れ、ノートル、ケールに至て全然消え失

せ、最初の作に見えた、人生に對する矯正的、道德的關係の缺陷が再び現はれて來た。モウパッサンが此の傾向を生ずるに至つたのは、人氣作者としての名聲一時に高く、既に一家を成した時である。蓋し彼も亦當代知名の作者殊に彼の如き、讀者を牽引する力ある作者の、免れざる誘惑に陥つたのである。誘惑の一は初期に於ける小説の成功、新聞雜誌の稱讚、社會殊に婦人社會の阿諛追従等であつて、一は収入の増加である。併し収入の増加は決して經費の増加と併行して進むものぢやない。更に進では出版者が、強て其作を要求するに至つたことである。彼等は名ある作者の作なら、諛辭百万争ふて其の原稿を買ひ取らうとするのである、作の良否は最早問はないのである、知名の作者の署名さへ得れば代作でも構はないのである。此の様な誘惑は遂に作者を邪道に陥れなければやまないのである。斯うなると作者は益々苦心して、前日の小説の形式を墨守し、或は一層形式を改善しようと努める。其の描く人物に對して愛憎を示すことあるも、善なるが故に、道德的なるが故に、即ち萬人に愛せらる

▲が故に之を愛せず、又憎むも悪なるが故に、萬人之を憎むが故に之を憎むにまらず、只快不快の感情の發作のまゝに、愛憎の情を恣にする。

ペラミー以來のモウパッサンの作は、皆躁急、甚しきは人工的の形跡を存しないものはない。彼は當初の二小説を描いた方法を捨て、了つた。最早或る要求を基とせず、其の基礎に依て人物の行爲を寫すことをなさないで、全く戯作者氣質となり、斗筭の文學者が小説を作るやうにして、小説を作るやうになつた。即ち最も興味ある、感情を動かすべき事件、若くは、同時代の人物と境遇とを見出して、是等に依りて其の小説を結構し、偶然得たる物語の骨組に、適當なる觀察を短釘補綴して、之に裝飾を施し、其の描き出されたる事件が、道德の要求に對して、如何なる關係を有して居るかといふやうな問題には、最早頭腦を悩まないのである。

例令ば妻が絶えず情人を有せるは、廣く世人に知れ渡りたる事實なるに、其の夫のみ之を悟らないといふと、夫は皆愚にして、欺かれ、嘲笑せらるゝに、

後に夫となるべき情人は嘲笑されず、欺かれず、獨り英雄的なりとは吾人の了解出来ないものである。更に婦人は凡て墮落するに、母となりてひとり聖なりとは又了解し難いものである。

不自然にして貫らしからず、殊に全然不道德的基礎に立てる小説中の主人公の苦悶は、殆ど吾人の感情を動かさない。ビエールとジエンの母は、生涯その夫を欺いて居ることが出来たけれども、自分の罪をその息子に白状しなければならなくなつた時にも、殆ど何等吾々の同情を動すことがない。況や彼女が、自然と現はれて来た幸福の機會を、利用するに過ぎなかつたと云つて、自分の行爲を正當なものと辯解して居ると云ふに至つては、尙更同情の限りでない。又フオル、コム、ラ、モー中の男が、生涯の間その友を欺き、その友の妻を墮落させたる後、老年の爲めその娘をも亦墮落させるとが出来なかつた爲め不幸になつたけれども、我々は尙更之に同情することが出来ない。最後の小説のノートル、ケールは諸種の男女の關係を記載したる外、何等内的目的を持つてない。

此の小説には慾にあきた怠惰な放蕩者を描いて居るが、此の放蕩者は自分の要求するものも知らず、或時は自分と同じく、或は自分より以上墮落したる婦人と同接し或時はその女を見捨て召使と同接し、次で前の者に戻つて、それから兩者と同接した。ビエール、エ、ジエン及びフオル、コム、ラ、モーに於てはもつと甚だしい所がある。併し此の最後の小説のノートル、ケールは不愉快な感を懐かせる許りである。

モウバツサンの初めの小説の、ユンヌ、ワイーに表はれて居る問題は、次の様な問題である、茲に一人の人間が居る、善良で、聰明で、愛すべき人で、善事は何事も好む人である。此の人が何かの理由で、粗野な氣むづかしい、愚な、野獸のやうな夫の犠牲となり、その後同じ様な息子の犠牲になつて居る。それで彼女は目的も無く、此の世に一事も爲さないで亡びる。何故此の様な末路となるか。著者は此の疑問を出して置いて、一つも解答を與へない。しかし彼の小説の全體、彼の女主人公に對する同情の念、及び彼を零落せしめたものを非難し

て居るのは、彼の疑問に對する充分なる解答である。若し彼女の苦悶を了解し、それを云ひ表はした人が一人でもあれば、その苦悶は既に償はれたのである。ヨブが友達が彼の苦悶を誰も知らないと言ふので、苦情を云つた時に、其を友達に打明けた如きものである。若し苦悶が発見され了解されれば、それは償はれて居る。それで茲で作者は此の苦悶を發見し、了解して、人々に表はしたのである。苦悶が一度償はれ、人々に依つて了解されれば、早晚無くなつてしまふのである。

次の小説のベラミーに於ては、何故正しい者が苦しむかと言ふのは問題ではなく、何故正しくない者が富を得、名譽を得るか、又富と名譽とは何であるか、富と名譽は如何にして得らるゝかと云ふ問題である。此も前の小説の問題の様に、その問題の内に解答がある。その答は外ではない、多くの人々に由つて非常に尊重されて居る者を排斥する、その排斥が則解答となつて居る。此の第二の小説の問題は、一層眞面目なものであるが、作者の此の問題に對する

道德的關係は、最早著しく薄弱になつて居る。第一の小説に於ては、汚點は只其處此處に表はれる許りであるが、ベラミーに於ては、此等の汚點は倍加する。そして汚點許りで満たされて居る章が澤山にある、此が又作者を喜ばして居る。

次の小説のモントリオールに於ては何故立派な婦人が苦しみ、野蠻なる放蕩者が成功し、幸福を得るかと云ふとは、最早問題になつて居ない。道德的要求は最早一つも認められない。併し何等の必要なく、又藝術的方面より考へても何等の必要もないのに、不潔なる煽情的描寫が表はれて居る。作者がその描寫する人物に對し、不道德的關係をもつより起る藝術的趣味破壊の一實例として、此の小説に於てその主人公の浴場に於ける光景を、細かに記載して居るのが殊に著しい。この描寫には何の目的もなく、小説の形式にも又内部の目的にも關係がないのである。

『桃色の肉の上に泡が出た』

『それがどうした!』と読者は訊く。『何でもない、此の様な描寫は自分が好むから描寫するのである』と作者は答へるのである。

次の二つの小説のピエール、エ、ジエン及びフォル、コム、ラ、モーに於ては道徳的態度は少しも認むるとが出来ない。此の兩小説は不徳、騙詐、虚偽の基礎に立つて居る、此等は人物を悲劇に陥れるものである。

最後の小説ノートル、ケールの人物は最も奇怪、野蠻、不道徳である。此の小説では、人物は最早何ものとも争はない、只快樂、虚榮、情慾を求むる許りである。然るに作者は此等の人物の性向に同情を表して居る様に見えるのである。此の最後の小説から推して考へて見るに、作者は人生の最大幸福は情慾の満足にある故、人々は最も愉快なる方法にて、この幸福を得なければならぬと云ふことになる。

人生に對する此の不道徳的關係は、半ば小説なるイヴェットに於ては殊に著しく現はれて居る、此の作の主人公の不道徳は實に恐る可きものである。

其の物語はこうである。一人の美少女が精神は無邪氣であるが、母の立交つて居る道樂社會で覺えた風習に墮落して、一人の放蕩者に遣り損ひをさせる。彼は此の少女に戀し、少女が母を見習つて、淫猥な馬鹿げた事を了解わかもしないで喋しゃつて居るのを、知つて言つて居ると想像し、既に墮落して居ると想像し、亂暴にも不徳な結合を求める。少女は彼を愛して居るので、此の侮辱に逢つて、喫驚し、自分と母がどんな位地に居るかと言ふとに始めて眼が覺めて、非常に苦悶する。此の深く人に感動を與へる場面、無邪氣な魂と世俗の墮落との衝突の場面が綺麗に描寫されて居る。此處で止めても可いと思はれるのに、作者は外部の形式にも内的生命にも 必要がないのに、物語を續けて、此の放蕩者は夜に乗じて、遂に少女を墮落させて居る。作者は此の小説の最初の部分にては、確かに少女に同情を表して居るが、後半に至て急に放蕩兒に同情を寄せて居る。かくて一方の印象が他の印象を破壊して居る。そして此の小説全體は支離滅裂となり、丁度捏ね固めない麵麩の様に碎けて了ふのである。

ペラミー後の總ての小説に於て（余は今茲で氏の短話を論ずるのではない、短話は實に氏の誇りとすべきものである。短話に就ては、後に至つて論ずるつもりである）モウバツサンは實に巴里の彼等の社會のみならず、又美術家の間に行はれて居る理論を奉じて居るのである。その理論とは外でもない、藝術的作品には、善惡に就て明晰なる觀念を有するは必要なるのみならず、藝術家は之に反して、總ての道德問題を全く無視しなければならぬ、茲に藝術的價値があると云ふのである。此の理論に従へば、藝術家は人生に眞實なるもの、眞に實在するもの、美なるもの、故に又藝術家を喜ばすもの、科學の材料として有用なるものをさへ表はすのが其の職務で、何が道德的で、何が不道德的であるか、何が善であるか、不善であるかと云ふ問題を考へるのは藝術の仕事ではない。

或る有名な美術家は、宗教上の行列を描いた繪を余に示したことがある。その繪は誠に立派な美しい繪であつた、けれども美術家のその作品に對する關係

は、少しも認むる事が出来なかつた。

そこで、私は問を發して、『貴君は此の儀式を善なりとし、舉行の必要ありと思ふか、否か』と訊いた。

私の問の單純なるに對して、幾分謙遜して、此の美術家は斯の如き事は知らない、又知る必要がない、自分の仕事は人生を表顯するのであると答へた。

『併し少くも貴君は此れに同情するでせう』

『同情するとは云ひ兼ねます』

『それでは此の儀式を好まないのですか』

此の近代的に深く教育を受け、人生の目的を了解せず、人生の現象を愛しもせず、憎みもせず、その有りの儘を表現した美術家は、余の愚問に對して憐憫の微笑を浮べて、『同情もせず又憎みもしない』と答へたが、悲しむべき事にはモウバツサンも、此の美術家と同じ考を持つて居たのである。

ピエール、エ、ジェンの序文に於て、彼は作者は何時も私を慰さめよ、私

を喜ばせよ、私を悲ましめよ、私の心を感動せしめよ、私を黙想せしめよ、私を笑はしめよ、私を戦慄せしめよ、私を泣かしめよ、私を考へしめよとの要求に接する。只僅少の識者丈が、最も深く君の氣質に適合する形式を以つて、美なるものを製作せよと藝術家に告ぐと云つて居る。

モウパッサンがその小説を書いたのは、此の識者の要求を満足させる爲であつた、彼は質樸に彼の社會で美と考へらるゝものは、實に美術の奉仕しなければならぬ美であると想像したのである。

而してモウパッサンの活動した社會に於て、藝術の奉仕を受くべき美と考へられたものは、重に婦人である、婦人との性的關係である、若い美しい婦人、大概裸にした婦人である。藝術界に於けるモウパッサンの仲間——畫家、小説家、彫刻家、小説家及び詩人——のみならず、又哲學者、新時代の先生達も此のやうな意見を懷いて居たのである。有名なルナンは、その著マルカス、オレリアヌに於て、基督教が婦人の美を了解しないと云ふので之を非難し、

淡泊に次の様に云つて居る。基督教の誤謬は充分に表はされて居る、基督教は餘りに道德的で、全く美を犠牲に供した、併し完全なる哲學の眼光を以て見れば美は單純なる皮相の利益、危険、不便である所ではなく、徳と同じく神の賜である。美は徳と同じ價值がある。美人が神の目的の一面を表はすことは、天才の男子又は有徳の婦人が、神の目的を表はすのと變りがないものである。美人は之を知つて之を誇とするのである。自分の肉體に有つて居る無限の寶を本能的に感じ、聰明の才がなくとも、技能がなくとも、何等特別の徳がなくとも、最高なる神の諸表現の間に列ぶことが出来ると云ふことを充分に熟知して居る。然るに之に與へられた賜を有利に表はすことを、何故に禁ずるか、自分の與へられたダイヤモンドを飾ることが何故悪いのであるか。

婦人のその身を飾るのは、義務を盡すのである。立派な美術である。或る意味に於て、最も人の心を魅する美術なのである。人類は諸問題中最も微妙なる問題、完全其ものゝ裝飾たる、人體の裝飾方法を知つて居る美術的希臘人に、天

才の榮冠を與へる、而かも或る人々は、神の最も美なる作品たる、婦人の美を進めようとするを、つまらない事とのみ見ようとするのである。婦人の化粧には色々な優美な事が伴ふので、化粧する其事が高尙な美術である。

之に成功することを知つて居る、時代と國民は、偉大なる時代で偉大なる國民である。基督教の歴史は、此の美術を除外して、基督教の懷抱して居つた社會的理想を、後代迄充分に發達せしむることが出来なかつた事を示して居る。此の後代に至つて、基督教に對する世人の反抗は、最初有頂天の狂熱によりて此の教派に加へられたる狹隘なる軛を破つて了つたのである。

それで此の新時代の先覺者の意見では、佛蘭西の女小間物屋及び理髮者が基督教の誤を正し、美をその真正にして高尙なる位置に回復したのはほんの此頃である。

彼の所謂美とは何を意味するのであるか、吾々に誤解なからしむる爲め、此の同じ有名な作者、歴史家、科學者はラベツス、ツ、ジュアールと云ふ戯曲を

書いて性交が此美に奉仕する最好の方法であることを示した。此の戯曲は、其の技倆の缺如、殊にダーケーとアベツスの談話のお粗末なので人を驚かすものがある。最初の一言で此の紳士は、多分無垢で、高德の處女と、どんな戀愛談をして居るか直ぐ分かる。此の處女は之を聞いて少しも驚かないのである。此の戯曲で、最も高尙なる道德を有する人々は、死と相對しても、死に先だち數時間前に於ても、動物的情慾に耽るより、何等善事を爲し得ざることが示されて居る。

故にモウパッサンの成長し、教育された社會に於ては、婦人美と情愛の表現は、最も聰明にして學識ある人士に由つて既に／＼承認され決定されたものとして、最高なる美術の眞正なる目的と考へられて居つた。

モウパッサンが人氣ある作者となつた時奉じたのは不合理甚だしき此の學説である。その當然の結果として、此の虚偽なる理想は、彼をしてその小説に於て幾多の誤謬に陥らしめ、益々其の作品を弱くしたのである。

此の點に於て彼の小説と短話の間には根本的相違がある。小説の目的は縦令表面上の目的でも、人間の全生涯の描寫なる故に、小説作家は、人生に於ける善惡に就ては、明晰確固たる觀念を有しなければならぬ。

然るにモウパッサンは此の觀念を持たなかつたのである。否、却て彼の懐いて居つた學說に據れば、斯の如きものは望ましくないと思はれたのである。若しモウパッサンが或る技量のない煽情的小説作家の如き小説家であつたなら、天才がない爲めに靜に惡を善として描き、彼の小説は彼と同意見の人々に取つては極めて興味あるものとして歡迎されたであらう。併しモウパッサンは天才を持つて居つた、換言すれば事物の真相を看破した、故に求めずして眞理を發見した、善なりと見做したかつた物の中に求めずして惡を認めたのである。彼の同情が初めの小説を除き、總ての小説に於て斷えず動搖して居るのは之が爲めである。或る時は彼は惡を善として表現し、或時は惡を惡、善を善と認め、又或る時は甲の立場から乙の立場に移り變つて居る。之が各美的印象の心髓を

破壊して居る。美術をよく知らない人々は、同じ人物が始めから終り迄其の中に活動し、總てのものが同一なる事件の計畫に建てられ、同一人の生涯が描寫せらるゝ時は美術の製作は統一を持つと云ふことを考へる。之は誤である。統一は皮相的觀察者にのみ眞實と見えるのである。總ての美術品を全體に結び付け、それに依て生ける如き幻像の効果を生ずるセメントは人物と場所の統一ではなく、作者の人物に對する獨立なる道德的關係である。實際我々が或る新作家の美術的作品を読み或は考査する時、我々の心の中に起る根本的疑問は、何時でも次の様な疑問である。作者は如何なる種類の人物であるか、吾々の知つて居る人よりも如何なる優つた點があるか、吾々が吾々の生涯を如何に見るべきかに關して、如何なる知識を吾人に與へ得るかと云ふ疑問である。美術家が何者を描くとも、それが聖人であらうとも、強盜であらうとも、王侯であらうとも、從僕であらうとも、吾人の求むる所見る所は美術家自身の精神である。若し作者が既に吾々の知つて居る人で名を成した人であれば、作者は如何なる

人かとの疑問は起さないが、併し更に何事の新しきを吾人に教へんとするか、今度は如何なる立場より吾々に人生を説明せんと欲するかとの疑問を起すのである。故に宇宙に就て明晰なる、確乎たる、新たなる意見を有たない作者、殊に此の如き意見を懐くを必要と認めない作者は、美術的作品を製作することが出来ないのである。此の様な作者でも多く又美はしく書くことは出来ない事はないが、美術品はその様な筆からは決して生れて来ない、モウパッサンの小説は正に此の如きものであつた。

彼の始めの二小説、殊に第一の小説に於て、彼が善に同情し悪を憎んだとすれば、それには二つの理由がある。第一に彼はユンヌワイの女主人公の模型となつた人物を心から愛し、尊敬し、ジュロアの模型となつた人物を、心から憎んだからである。そしてジュロアにはモウパッサン自身が一部分描寫されて居るのである。第二に彼の始めの小説の時には、彼は未だ人氣作者とならなかつたからである。人氣作者の弊害に陥らなかつたからである。従つて彼の

社會に廣く行はれて居た、美術の目的は單に美なるものを作るにある、とする學説を有つて居なかつたのである。併し彼が此の學説に従つて小説を書き始めた時にはイヴェット及びノートル、ケールに於て表はれた所のものが、求めずして起つて來たのである。即ち彼が描いた人物の行爲に對して矛盾せる評價を生じたのである。作者は愛すべきものと憎むべきものとを知らない、従つて讀者も亦之を知らない、知らないから讀者は描寫された事件に對して、何の興味を持たないのである。故に最初の二小説（嚴密に云へば最初の小説一つ）を除けば、モウパッサンの小説は小説としては皆薄弱である。若しモウパッサンが單に此の二小説だけ吾人に残したと假定すれば、光輝ある天才が社會の變則なるが爲めに亡びる好實例を残すに過ぎなかつたのであらう。變則なる社會とは、美術を愛せず、従つて美術を了解しない人民が發明した、虚偽の美術が行はれる所である。所が幸にモウパッサンは短話を書いた、その短話に於ては虚偽の美術論に支配されなかつた。美なるものを書かずして彼の道徳的感情

に觸れ、道徳的感情に反抗したものを書いた。此等の物語に於ては、(總てではないが其中の最良なるものに於ては)、此の道徳的感情が如何に作者の中に成長し、以前彼の生涯の重なる意義と幸福を成せるものが、徐々と無意識の間に、彼の爲めに斥けられ、その眞正なる價値に於て評價されたかを、觀察する事が出来る。

若し彼が虚偽なる理論の影響の爲めに、自らを害しさへしなかつたならば、眞正なる天才人の驚くべき技量は正しき方面に發揮されたであらう。即ち天才は天才者を教へ、道徳的發達の道に彼を導き、彼をして愛すべきものを愛せしめ、憎むべきものを憎ましめる。美術家は事物を自分が見たいと思ふ様に見ず、事物の有るが儘を見る故に美術家である。天才者も亦人であるから誤謬に陥ることがあるが、併し若しモウパッサンがその短話に於て天才を自由に發揮した如く、天才を何等束縛を加へず、自由に發展させれば、天才者の天才は彼にその目的を示し、彼をして若しそれが愛すべきものなれば愛せしめ、憎むべきも

のなれば憎ましめるものである。眞正なる美術家が社會の影響を受けて、表現すべからざるものを表現する時には、パライムのやうになるのである。パライムは祝福しやうと思へば呪詛すべきものを呪詛し、呪詛しやうと思へば祝福すべきものを祝福した。彼は自分の希望する所を爲さなかつたけれども、自分の爲すべき事を、求めずして爲すのである。そして此の事はモウパッサンにも見る事が出来るのである。

モウパッサン程、凡ての幸福、凡ての人生の意義は婦人であり、愛にありと衷心より思つた作者、彼が如き力ある情熱を以て、婦人と其愛を凡ての方面より描寫した作者、人生に最大幸福を與ふる様に思はれる婦人の恐しき形象すかたを、彼が如き明晰、的確を以て、悉く表現した作者は殆ど他に類がない。彼が深く此の問題に探り入れれば入る程、婦人の眞相は益々暴露し來り、凡ての外彼は悉く脱落して、後に残つたものは、只其の恐しき結果、それよりも尙ほ恐しき心臓ばかりであつた。

ルミットにある馬鹿息子と娘、ルポーにある水夫と其妹の物語シヤン、ドリーヴ。ラ、ベチット、ロツク。ミス、アリエ。モシウ、バレン。ラルモアル等を読みスール、ローにある結婚談、最後にアン、カ、ツ、ヂヴオース等を読んで見よ。モウバッサンは人の魂を亡ぼす光輝ある美像を作つて、マルカス、アウレリアスの勸説したもの即ち人の想像に現れる此の罪の引力を破壊する方法の發明に成功して居る。彼は此の愛を稱讚しようと思つたが、之を研究するに従て益之を咀ふに至つた。彼は之に伴つて来る災害、苦悶、其の失望、殊に眞の愛の伴はり、騙詐、幻影、此等のものは人が之に荒めば荒む程、其の苦悶を益々深くする爲めに之を呪ふた。

彼の文壇に活動して居る間に、作者に表はれた有力なる道徳的發達は、此等の立派なる短話、及びその最も良好なる作品たるスールローの中にある手紙に書かれて居る。

作者の此の道徳的發達は、啻に性愛の放棄に見らるゝのみならず、彼が人生

に適用せる、高尚なる道徳的要求に於て見る事が出来る。彼は啻に性愛に於て動物と合理的人間の要求の間に於ける内的矛盾を認むるのみならず、又世界の總ての組織の中に此の矛盾を認めて居る。

彼は此の現實の世界、此の物質的世界は、啻に最善なる世界に非るのみならず、最善の世界とは正反對のものであること、(此の考はホルラーに於て見事に發表されて居る)、及び此の世界は理性と愛の要求を満足させない事を認めて居る。彼は或る他の世界がある。少くも此の如き他の世界に對する要求が、人間の魂にあると云ふことを認めて居る。

彼は此の物質界の不道理、醜惡に苦めるのみならず、又その愛のないと及び不統一に苦しんで居る。迷へる人間が寂寞に堪へずして、絶望の叫聲をあげて居る有様が、彼の最も精巧なる短話、ソリチチユードに最もよく表はされて居る。

最もモウバッサンを苦しめて居るものは人間の痛ましき寂寞の状態、精神的寂寞の状態である。此の事は彼は繰返し／＼描いて居る。彼を苦しめて居るの

は人間とその同類の間を隔つる垣である、此の垣はその人々が肉體的に近き關係があればある程尙痛ましく感ずるのである。

然らば彼を苦めるもの、此の垣を破るものは何か、此の寂寞を消滅せしむるものは何か、愛である、婦人の愛ではない、彼が嫌惡した、婦人の愛ではない、併し純潔なる、精神的なる、神聖なる愛である。

モウバツサンの求むるものはこれである。彼が自分を圍める桎梏の間にありて痛ましくも努力して居る所のものは、昔明かに人間に示された此の生命の救である。

彼は彼の求むる者に未だ名稱を與へる事が出来ない、多分彼に取て聖の聖なるものを穢すことを好まないから、自分の唇を以つて命名することを望まないであらう。併し彼の云ひ表はされぬ憧憬はその寂寞の恐怖に示されて居るが極めて眞摯なるもので單に唇を以て説かるゝ、多くの説教より、強く人を動かし人を引きつける力がある。

モウバツサンの生涯の悲劇は、最も奇怪なる不道德的社會にありて、彼の天才に依り、彼の内部に宿りし異常なる光によつて、その社會から脱出せんと煩悶し、殆ど救済を得るに近く、已に自由の空氣を呼吸して居たことである。併し彼の最後の力を此の努力に費し、更に一段の努力を爲すことが出来ないで、彼は自由を得ずして倒れたことである。

此の零落の悲劇は、今日でも尙ほ現代の所謂教育ある人士の多數の間に行はれて居るのである。

一般の人間は彼等の生涯の意義に關して一定の概念を持たない者はない。何時でも、至る所に、所謂豫言者と稱する天才ある人物が現はれて、人生の意義目的を人々に説明して居る。而して普通人は自ら人生の意義を發見する力がないので、豫言者が彼等の爲めに發見した、人生の説明に従つて行くのである。

人生の意義に關する吾人今日の觀念は、一千八百年以前基督教に依つて簡單に、明白に、間違なく、喜ばしく説き明されたものである。此の事は此の觀念

を承認し、此の觀念に従つてその生涯を送つた人々に依つて證明さるゝ所である。

然るに此の教を誤解し、全く此の教を無意味ならしめた者がある。今日は人々は正統派の基督教を承認すべきか、又はルナン其他の人々の教訓に従つて生涯を送るべきか、詳しく云へば何等の指導なく、人生を了解せず、體力の強き間は情慾に耽り、情慾の衰へる時は其習慣に溺れて生涯を送るかと云ふ大聯魔にかゝつて居る。

人々、普通の人々は甲か乙かを取る、時としては兩者を取て居る。初めは放蕩に耽り次で正統派を取つて居る。今の全時代は眞理を表す爲でなく、眞理を隠す爲めに發明された種々な學説いんごを以て身を守つて生活して居るのである。普通人殊に遲鈍な人間は之で満足して居る。

併し又之と別種類の人々がある、(多くはない極めて稀れである)モウパッサンの様な人は即ち之で、彼等は自分の眼を以て事物の眞相を見、その意義を發

見し、他人の知らない人生の矛盾を發見するのである。此等の矛盾が必然彼等を導き行く可き路を明に認めて、自分の周圍を顧みて之が解決を求めらるのである。彼等は此等の解決法をその發見さるべき所即ち基督教以外の所に求めて居る。此れクリスト教が彼等に死に損ひの不合理と見え、その畸形によつて彼等と相反發したからである。彼等は此等の解決法を發見しやうと爲ても發見する事が出来ないで、その解決法が存在しないと云ふ確信を懐くに至つた。此等解決の出来ない矛盾は吾人の生涯に先天的に固有して居ると確信して居る。そこで斯の様な決論に達して若し此等の人々が弱い力のないものであれば、此の無意義の生涯を思ひ、彼等の無智を道徳と考へ、修養の標と考へて、彼等の位置を誇とさへする。併し若しモウパッサンのやうに勢力あり、眞實なる材能ある者なれば、彼等は此の様な生涯に満足せず、何等かの方法を以て、此の不合理なる生涯を脱れやうと努力する。

此と同じく野原に於て渴けるものは、人々が泉の圓かこみに立つてその泉を發し、

斷えず下から湧き出づる水の代りに悪臭ある泥を人に與へて居る附近の外は何處でも清水を求めるとが出来る。モウパッサンは丁度斯の様な境遇にあつた。彼は自分が捜し求めて居つた眞理が、昔既に見されて彼の近くにあると云ふ事を信じ得なかつた。その事は彼は夢にも思ひ附かなかつた。又彼は人間が彼が自ら入つて居つた様な矛盾の中に生活する事が出来るとは、信ずる事は出来なかつたのである。

彼が教育され、彼を取圍んで居つた理論、彼の年若き體力の丈夫な生活の淫樂に由つて確證された理論に従へば、人生は婦人の愛を主とした快樂である。此の愛を描き、之を他人に及ぼす反省的快樂である。併し此等の快樂を調べて見ると、その中には此の愛と此の美に全く關係の無い反對して居るものが見える。婦人は或る理由で姿態を損ふ、懐胎する、いや／＼子供を生む、子供が生れる、望まない児供が生れる、それから騙詐、殘酷、それから道德上の苦悶、それから老齡、次で死が来るのである。

加之此の如き美は眞に美であるか、如何にして此の如くなるのであるか、若し年齢が進むとを了解するとが出来さへすれば極めて妙であらう、年齢が進むとはどんな意味であるか、髪が抜け落ちることである、白くなることである、齒が弱るとである、皺のよるとである、呼吸の苦しくなることである。終焉の前に總ての物が恐ろしく嫌らしくなる、塗りつけた紅脂、白粉、汗、臭氣、畸形が衰はれる、然らば余の奉仕したものは何處にあるか、美が何處にあるか。その中に總てが包含されてあるそれが消え失せたのである。後には何もかも残らないのである、即ち生命がないのである。

併し生命があるやうに思はれたものに生命がないばかりでない。人は自ら生命を放棄し始める、即ち弱る、美が衰へる、分解する。外のものが自分の眼前で、生活の快樂を掠め取つて了ふ。之ればかりではない、もう一つの生活の可能が心中に閃めき渡る。其處は人々の關係、凡ての世界と吾人との關係が今迄とは全く違つて居る。此等の騙詐を許さない。如何なる方法を以ても破ると

の出来ない、眞實なる、更に美なる生活である。……併し之は現世に存在するとの出来ないものである。それは吾人を誘ふオアシスの幻影に過ぎない、吾々はその存在しないと、周囲が砂漠で取巻かれてゐると云ふ事を知つて居る。モウパッサンは人生に於ける其の悲劇の瞬間に到着した、即ち彼の周囲の生活の虚偽と、彼が漸く意識し始めた眞正なる生活との争の始まつた瞬間が之である。精神的出産の第一痛が既に彼の中に始まつてゐるのである。

彼が其の傑作殊に其の短話に於て表はしたのは、此等出産の苦痛である。彼の苦痛が産の苦痛の中に死ぬる爲めにあらずして新に生るゝ爲めの苦痛であつたとすれば彼は吾々に偉大なる教訓的作品を與へたのであらう。實際彼が其の出産の苦痛に於て吾々に與へたものは多大である。吾々は此の力ある眞實なる人に彼が吾々に與へて呉れたものに對し感謝を表しなければならぬ。

(終り)

大正三年九月五日印行
 第三十五編
 アカギ叢書
 ドストエフスキエー論

著者 葛西又次郎
 発行者 赤城正藏
 印刷者 中田福三郎
 印刷所 秀英舎第一工場

東京市麹町区三番町五〇
 電話番町二二八〇番
 櫻井口座東京一〇四三二

東京市込區市谷加賀町一丁目十二番地

定價金拾錢
 (郵税金別)

赤城正藏
 全國各書林

發兌所 元

の本日

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

アカギ叢書

特色

ムラクレ

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

○紳士の標準智識○

1. 古今東西の科學藝文中 紳士の標準智識たるべきものを採取し解説せり
2. 従前の刊行物の高價、尨大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも關せず止むを得ず閉却せられたるもの多きを復ひ専ら廉價、平易、簡明に解説し刊行せり
3. 内外の傑作の紹介は簡単にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし

○世界學術の叢淵○

◀各册金拾錢也▶

アカギ叢書

毎月數篇 逐次刊行

〔定價金拾錢 郵稅各貳錢〕

- | | | | | | | |
|------|------|----------|-----|---------|----------|-------|
| ○第一編 | 歐洲文藝 | イブセン | 原人編 | ▲ | 人形の家 | (ハラ名) |
| ○第二編 | 哲學叢話 | 中島文學士編 | ▲ | プラグマチズム | | |
| ○第三編 | 歐洲文藝 | ダマシチオ | 原人編 | ▲ | 廢都 | |
| ○第四編 | 社會學叢 | ルボン | 原人編 | ▲ | 群衆心理 | (上卷) |
| ○第五編 | 歐洲文藝 | ドストイエフスキ | 原作 | ▲ | 痴人 | |
| ○第六編 | 歐洲文藝 | 村上靜人 | 著 | ▲ | ウエトと其著作 | |
| ○第七編 | 哲學叢話 | 三浦文學士 | 篇 | ▲ | ベルグソンの哲學 | |

○第八編	歐洲文藝	オスカア・ウワイルド	村上 静人 譯	▲	サ	ロ	メ					
○第九編	哲學叢話	中島文學士編	▲	オ	イ	ケン	の	哲	學			
○第十編	博物叢話	寺尾理學士編	▲	イ	ダ	ン	の	ウ	進	化	論	
○第十一編	日本史談	龍居文學士著	▲	文	文	政	化	江	戸	の	世	態
○第十二編	歐洲文藝	フライタツハ	齋藤文學士編	▲	劇	喜	新	聞	記	者		
○第十三編	歐洲文藝	スチヴンソン	齋藤文學士編	▲	壺	の						
○第十四編	歐洲文藝	トルストイ	村上 静人 編	▲	復							
○第十五編	歐洲文藝	(絶版發賣禁止)	▲	レ	デ	イ	ー	ス	マ	ン	(ベラ、ミ)	
○第十六編	美術叢話	佐々木文學士著	▲	奈	良	の	美	術				

○第十七編	歐洲文藝	モーパッサン	村上 静人 編	▲	女	の	一	生				
○第十八編	歐洲文藝	メーテルリンク	村上 静人 編	▲	モ	ン	ナ	、	ヴ	ァ	ン	ナ
○第十九編	日本史談	龍居文學士著	▲	日	本	建	築	史	要			
○第二十編	社會學叢話	ルポ 原	葛西又次郎 譯	▲	群	衆	心	理	(下卷)			
○第二十一編	美術叢話	桑山文學士編	▲	支	那	の	美	術				
○第二十二編	歐洲文藝	板垣文學士編	▲	ワ	ン	ダ	ー	、	ブ	ツ	ク	
○第二十三編	歐洲文藝	ストリンドベルヒ	村上 静人 編	▲	父							
○第二十四編	歐洲文藝	沙村 静翁	村上 静人 編	▲	ハ	ム	レ	ツ	ト			
○第二十五編	歐洲文藝	ダマシチオ	日野月文學士編	▲	全	ジ	ヨ	バ	ン	ニ	(上卷)	

○第廿六編	歐洲文藝	全	▲	全	▲
○第廿七編	歐洲文藝	村上静人編	▲	神	▲
○第廿八編	日本史談	龍居文學士著	▲	鎌倉の史話	▲
○第廿九編	歐洲文藝	ヘツベル原編	▲	ユーデット	▲
○第卅編	歐洲文藝	ピエトロ・コッサ編	▲	皇帝ネロ	▲
○第卅一編	禮節叢話	獨逸大使館員著	▲	歐洲禮節	▲
○第卅二編	歐洲文藝	村上静人編	▲	海の夫人	▲
○第卅三編	宗教叢話	東北大學講師編	▲	オイケンの宗教思想	▲
○第卅四編	地理叢話	マルコポーロ原編	▲	東方見聞録	▲

○第卅五編	歐洲文藝	トルスツイ原著	▲	ドストイェフスキ論 附モウパッサン論	▲
○第卅六編	歐洲文藝	ストリンドベルヒ編	▲	絆	▲
○第卅七編	歐洲文藝	トルストイ原編	▲	暗の力	▲
○第卅八編	歐洲文藝	シヨウ原編	▲	武器と人 (チヨコレツト兵隊)	▲
○第卅九編	歐洲文藝	イブセン原編	▲	鴨	▲
○第四十編	歴史叢談	小林愛雄著	▲	神話と傳説	▲
○第四十一編	歐洲文學	ズーデルマン編	▲	マダダ (故郷)	▲
○第四十二編	歐洲文藝	ドストイェフスキ編	▲	虐げられし人々 (上巻)	▲
○第四十三編	歐洲文藝	ツルゲニエフ原編	▲	初恋	▲

○第四十四編	演藝叢談	小林愛雄 著	西洋演劇史
○第四十五編	歐洲文藝	フロオベル 原作 畑文 編	サランボー
○第四十六編	音樂叢話	小山文學士 著	日本淨瑠璃史
○第四十七編	歐洲文藝	モーパッサン 原作 半田文學士 編	ピエール・と・ジアン
○第四十八編	歐洲文藝	ダヌンチオ 原作 日野月文學士 編	死の勝利
○第四十九編	歐洲文藝	シエンキウイツチ 編 桑山文學士 編	何處へ行く
○第五十編	歐洲文藝	ドストイエフスキイ 編 大井包高 編	罪と罰
○第五十一編	歐洲文藝	ドオデエ 編 黒田文學士 編	サフオ
○第五十二編	歐洲文藝	ドストイエフスキイ 原作 加藤朝鳥 編	虐げられし人々 (下巻)

○第五十三編	歐洲文藝	ハウプトマン 原作 山本雄三 編	日の出前
○第五十四編	歐洲文藝	ホフマンスタール 原作 村上静人 編	エレクタラ
○第五十五編	歐洲文藝	グラーテ 原作 佐々木文學士 編	ヘルマントドロテア
○第五十六編	歐洲文藝	イブセン 原作 香西敏 編	幽霊
○第五十七編	歐洲文藝	ゾラ 原作 村上静人 編	女優ナ
○第五十八編	歐洲文藝	ヘツベル 原作 黒田文學士 編	マリア、マグダレーネ
○第五十九編	歐洲文藝	シヨウ 原作 島田青峯 編	ウォーレン夫人の職業
○第六十編	歐洲文藝	ツロオベル 原作 村上静人 編	マダム・ボバリ
○第六十一編	歐洲文藝	文學士魚澄總五郎 著	新文明源流 (日本洋學の發達)

214
970

○第六十二編 歐洲文藝 文學士 佐々木青葉村著 ▲日本の彫刻 ▼

○第六十三編 歐洲文藝 文學士 齋藤茂編 ▲シーザー傳 ▼

○第六十四編 歐洲文藝 イエーッ原 栗原古城譯 ▲幻の海 附イエーッ詳傳 ▼

○第六十五編 歐洲文藝 ズーダーマン 山本有三編 ▲名譽 ▼

○第六十六編 歐洲文藝 東北大學講師 佐藤正著 ▲近世社會運動 ▼

○第六十七編 歐洲文藝 文學士 小山龍之輔編 ▲源氏物語 (上卷) ▼

○第六十八編 歐洲文藝 トルストイ原作 板垣文學士編 ▲アンナ、カレニア ▼

○第六十九編 歐洲文藝 文學士 小山龍之輔編 ▲源氏物語 (下卷) ▼

● 頒布部數數十、成書既刊目錄 ●

終

